住吉周辺の歌碑・記念碑めぐり

関西大学なにわ大阪研究センター

はじめに

住吉は名所である。古来、和歌や文学作品に数多く、住吉は登場する。万葉集には、住吉（すみのえ）を詠んだ歌が神名も含めて四十首ほどあり、その中に、天平六（七三四）年春三月の難波宮行幸の時の歌うたがある。そのうちの一首、

従千沼廻　雨曽零来　四八津之白水郎　網手綱乾有　沾将堪香聞（⑥九九九）

（千沼回より　雨そ降り来る　四極の海人　網手綱干せり　濡れもあへむかも）

右一首遊覧住吉浜還宮之時道上守部王応詔作歌

この左注にあるように、住吉は難波の宮に赴いた官人たちの遊覧の地であった。官人たちが男女交えて住吉の浜辺に遊ぶ姿は、現在の浜寺のリゾート地を彷彿させる。

大夫者　御獦尓立之　未通女等者　赤裳須素引　清浜備乎（⑥一〇〇一）

（ますらをは　み狩に立たし　娘子らは　赤裳裾引く　清き浜辺を）

右一首山部宿祢赤人作

馬之歩　押止駐余　住吉之　岸乃黄土　尓保比而将去（⑥一〇〇二）

（馬の歩み　押さへ留めよ　住吉の　岸の黄生に　にほひて行かむ）

右一首安倍朝臣豊継作

住吉の大神は、海の安全を守る神としてあがめられた。巻十九には、遣唐使を送る時に、住吉の神に旅の安全を祈る歌がある。

民部少輔丹治真人土作歌一首

住吉尓　伊都久祝之　神言等　行得毛来等毛　舶波早家无（⑲四二四三）

（住吉に　斎く祝が　神言と　行くとも来とも　船は速けむ）

天平五年贈入唐使歌一首〈并短歌〉作主未詳

虚見都　山跡乃国　青丹与之　平城京師由　忍照　難波尓久太里　住吉乃　三津尓舶能利　直渡　日入国尓　所遣　和我勢能君乎　懸麻久乃　由々志恐伎　墨吉乃　吾大御神　舶乃倍尓　宇之波伎座　舶騰毛尓　御立座而　佐之与良牟　礒乃埼々　許芸波氐牟　泊々尓　荒風　浪尓安波世受　平久　率而可敝理麻世　毛等能国家尓（⑲四二四五）

（そらみつ　大和の国　あをによし　奈良の都ゆ　おし照る　難波に下り　住吉の三津に船乗り　直渡り　日の入る国に　遣はさる　我が背の君を　かけまくの　ゆゆし恐き　住吉の　我が大御神　船の舳に　うしはきいまし　船艫に　みたしまして　さし寄らむ　磯の崎々　漕ぎ泊てむ　泊まり泊まりに　荒き風　波にあはせず　平けく　率て帰りませ　もとの朝廷に）

反歌一首

奥浪　辺波莫起　君之舶　許芸可敝里来而　津尓泊麻泥（⑲4246）

（沖つ波　辺波な立ちそ　君が船　漕ぎ帰り来て　津に泊つるまで）

古事記には、朝鮮半島に向かう神功皇后の夢に墨江の大神の神託があったことが記されるが、万葉人にとって、住吉の神を斎くのは、それがそのまま海の安全を祈ることであった。

これらの歌うたを刻んだ万葉歌碑が、住吉大社周辺に五基ほどある。一九九一年に建立された⑩の住吉万葉歌碑はその代表例。石柱に古代の船を配したユニークな碑形に、十七首の万葉歌が刻まれている。今回は、都合で行けなかったが、安立町の、霰松原公園と異名を持つ安立南公園には、慶雲三（七〇六）年の難波行幸時に長皇子のよんだ、

霰打　安良礼松原　住吉乃　弟日娘与　見礼常不飽香聞（①65）

（あられ打つ　安良礼松原　住吉の　弟日娘子と　見れど飽かぬかも）

の歌碑もある。

住吉大社は歌道の神でもある。伊勢物語に登場する、

むかし、帝、住吉に行幸したまひけり。

われみても　ひさしくなりぬ　住吉の　岸の姫松　いくよへぬらむ

おほむ神、現形したまひて、

むつましと　君は白波　みづがきの　ひさしきよより　いはひそめてき

（百十七段）

のやりとりについては、古今集や伊勢物語の古注、あるいは歌学書などに多くの伝承を伝える。玉津島明神、柿本人麻呂とならんで、和歌三神とされ、多くの歌人、俳人の詣でるところとなった。住吉周辺には、そんな歌碑や句碑も数多く存する。

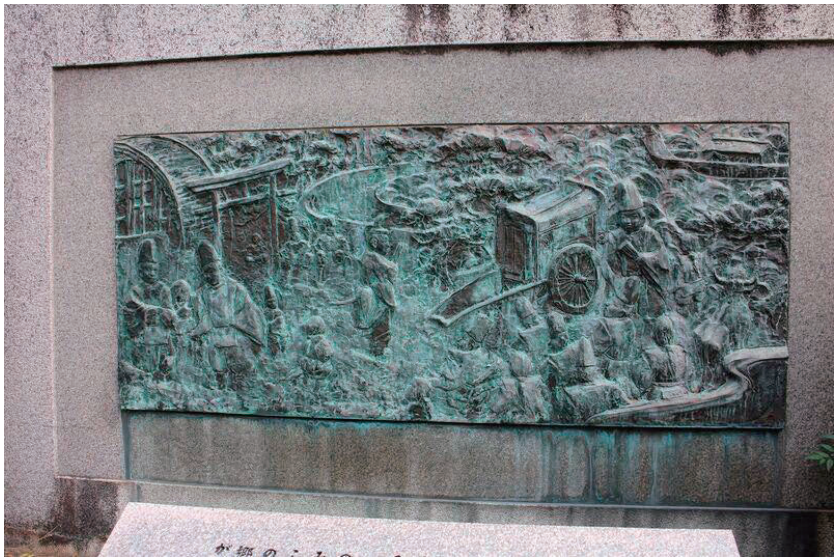
そんなわけで、今回、住吉大社周辺の歌碑や句碑といった文学碑を訪ねて住吉周辺を歩くたよりにすることを企画したのだが、文学碑以外にもさまざまの碑があり、それらは、それぞれの建立の由緒書も含めて、住吉の歴史を知るうえで貴重な情報をわれわれに与えてくれていることに気づいた。たとえば、⑱～⑳の碑では、御田植神事と新町との関係を知ることができる。また、荘厳浄土寺の後村上天皇の歌碑㉜からは、太平記の世界がしのばれるし、西鶴の句碑からは、住吉大社社頭での大矢数の興行が思い描かれる。そこで、この報告書においては、贅言をひかえて、シンプルに碑の写真と資料との構成によって、住吉を歩くしるべとするものである。

なお、本報告は、碑の撮影、資料の収集と整理など、全面的に本学大学院学生の大久保北斗、山口翔平、山口龍輝、鷲尾亜莉沙四氏の献身的な協力を得てなったものである。

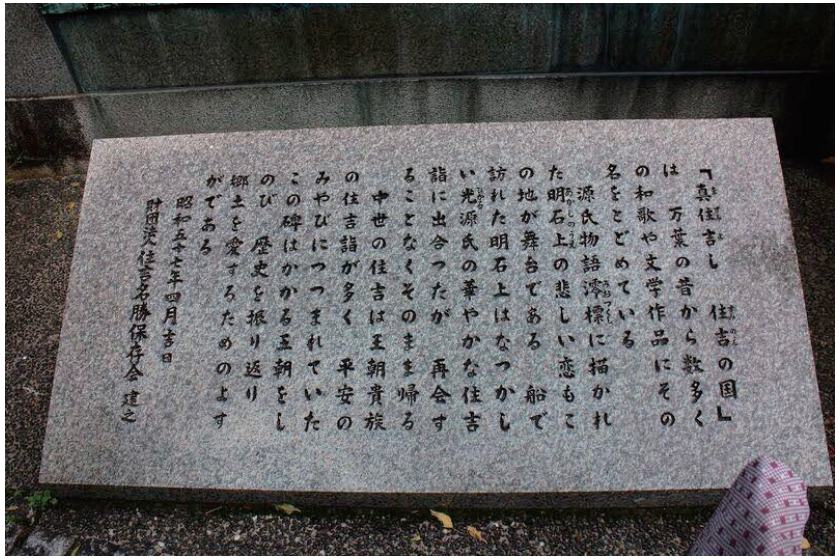
目次

①住吉記念碑……1
②松尾芭蕉句碑……4
③汐掛道の記……7
④中村若沙句碑……9
⑤高木石子句碑……11
⑥阿波野青畝句碑……13
⑦宮本竹逕歌書碑……16
⑧大橋桜坡子句碑……19
⑨都鳥社歌碑……21
⑩住吉万葉歌碑……23
⑪海竜王処碑……30
⑫井原西鶴句碑……33
⑬大伴大江丸句碑……35
⑭川端康成碑……37
⑮津守国美歌碑……39
⑯天皇陛下御在位六十年奉祝記念碑……41
⑰安江不空歌碑……45
⑱木原茂平翁遺績碑……49
⑲此式自上古……51
⑳新町廓……53
㉑御文庫……56
㉒安田青風歌碑……60
㉓生田南水句碑……62
㉔光台院親王歌碑……65
㉕浅沢の杜若……67
㉖蜀山人狂歌碑……69
㉗一運寺句碑……72
㉘法然歌碑……73
㉙摩耗不明碑……75
㉚神明穴立石……76
㉛万葉歌碑……78
㉜後村上帝歌碑……81
㉝細江川碑……83
㉞藤原俊成歌碑……85
㉟藤原定家歌碑……86
㊱宗良親王歌碑……87
㊲顕昭歌碑……88
碑の所在地……89
参考・引用文献一覧……92

①住吉記念碑



記念碑建立記念


「住吉の国」
住吉の昔から数多くは　万葉の
の和歌や文学作品にその
名をとどめている
源氏物語澪標に描かれ
た明石上の悲しい恋もこ
の地が舞台である　船で
訪れた明石上はなつかし
い光源氏の華やかな住吉
詣に出合ったが　再会す
ることなくそのまま帰る
中世の住吉は王朝貴族
の住吉詣が多く　平安の
みやびにつつまれていた
この碑はかかる王朝をし
のび　歴史を振り返り
郷土を愛するためのよす
がである
昭和五十七年四月吉日
財団法人住吉名勝保存会　建之

【碑面】

「真住吉し住吉の国」は、万葉の昔から数多くの和歌や文学作品にその名をとどめている。源氏物語澪標に描かれた明石上の悲しい恋もこの地が舞台である。船で訪れた明石上はなつかしい光源氏の華やかな住吉詣に出合ったが、再会することなくそのまま帰る。

中世の住吉は王朝貴族の住吉詣が多く、平安のみやびにつつまれていたこの碑はかかる王朝をしのび、歴史を振り返り、郷土を愛するためのよすがである。

昭和五十七年四月吉日

財団法人住吉名勝保存会　建之

【裏面】

記念碑建立記念
昭和五十七年四月吉日
財団法人住吉名勝保存会
理事長　高野光男
常任理事　東武
常任理事　天野要
理事　池永政彦
理事　絹巻薫
理事　小山育太
理事　笹川了太
理事　中井武兵衛
理事　中野正治郎
理事　西本泰
理事　橋口新太郎
理事　吉村鉄太郎
監事　高木幸太郎
監事　平田英一
事務局長　奥野茂寿
（下部に横書き）設計施工㈱大阪美術設計

【出典】

「真住吉し住吉の国」は風土記逸文『摂津国風土記』に登場する。

【住吉と源氏物語】

住吉と源氏物語の関係について、大阪市立美術館編（二〇一〇）『住吉さん　住吉大社一八〇〇年の歴史と美術』では以下のように述べている。

平安時代の住吉信仰が豊かに描かれているのは『源氏物語』であります。須磨巻・明石巻には、光源氏の父帝と明石入道の住吉明神への厚い信仰が、また、澪標・若菜下には、光源氏の住吉詣が描かれています。光源氏は、賢木巻の朧月夜内侍との逢瀬に端を発して、横ざまの罪にあい、須磨の地に謫居させられます。通常は、それで政治生命は終わってしまいますが、光源氏は、須磨で三月上巳の祓を行うとき、にわかに暴風雨が起こり、住吉明神のお陰をもって、異例の道を歩みます。

源氏は帰洛ののち三十歳の秋、中央に復帰できたときの御礼参りとして住吉詣を行います。二度目は、源氏との間に生まれた明石の姫君は東宮妃になり、やがて東宮が新帝に即位されて女御となり、その一の宮の皇太子をみることになります。源氏四十六歳の栄光の御礼参りであります。このような展開をみますと作者紫式部自身の住吉明神への信仰が並々でなかったこと、明石入道が熱烈な住吉明神の信者であったことも事実であり、明石の地は『住吉神代記』にも播磨一円が住吉神領であった中でも「魚次浜一処」とあってとくに密接な関係がありました。こうして、住吉現人神の信仰は、「住吉の松」の歌枕とともに、謡曲「高砂」にみられる住吉・高砂の相生のめでたさをうたう円満長寿・寿福慶賀の意を表象する神として現代に継承されています。

②松尾芭蕉句碑

【碑面】

升買て分別かはる月見かな　翁

【解説看板】

松尾芭蕉句碑

升買て分別かはる月見かな　翁

芭蕉は元禄七年（一六九四）九月九日、故郷の上野から奈良を経て大坂に入り、十三日には住吉の宝の市で名物の升を買っている。これはその翌日の句席での挨拶の発句。

住吉の津は古くから海外貿易の拠点として栄え、定期的に市が開かれ、経済だけでなく文化の発展にも大きな役割を果たしてきた。宝の市はその名残りで、江戸時代には社前で売られる升を求める参詣人で賑わった。

芭蕉は同年十月十二日、南御堂近くで没しているので、住吉詣でと、宝の市は生涯最後の旅で、ここがゆかりの地となっている。

この句碑は元治元年（一八六四）芭蕉没後百七十年を記念して、大阪の俳句結社「浪花月花社」が建てたものである。

㈶住吉名勝保存会

【出典】

加藤楸邨（一九六〇）「松尾芭蕉集（上）」、『古典日本文学全集　３０』筑摩書房

弓場史郎（一九七七）「大阪と芭蕉―住吉升市の句―」『すみのえ』一四五号、住吉大社社務所

【補足情報】

おもては不鮮明なため翻刻不能だが、おそらく説明の冒頭の通り。

前記の解説看板には「句席での挨拶の発句」とあるが、真弓（二〇〇三）『住吉信仰』には以下のように説明されている。

元禄時代の文人では、松尾芭蕉も社参して一句を読んでいます。元禄七年（一六九四）九月十三日、宝の市の宵でありました。宝の市というのは神功天皇が三韓よりの貢物を庶民に頒たれたという故事に因んで社頭に市が立ち、とくに升を売ったので「升の市」とも呼ばれたものです。その升を用いると、住吉さんのご利益でよくもうかるという信仰があって、人々はこぞって升を買ったのです。

芭蕉はこの日、神前に額ずいたあと、一合升一つ買いました。そのことは芭蕉自身が近江膳所の門人水孫右衛門に宛てた手紙に記していて、

十三日は住よしの市に詣でて

升かふて分別かはる月見哉

壱合升一つ買ひ申候間かく申候

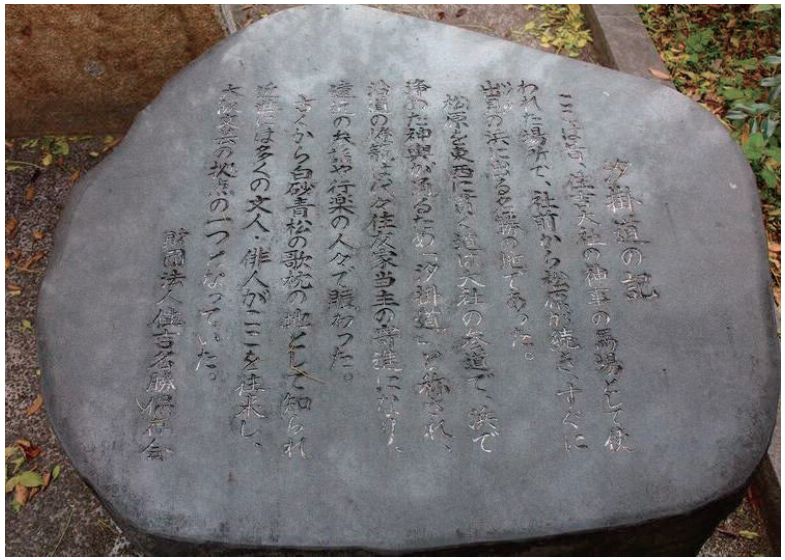
とあるものです。

風流な月見をしようと思って住吉に詣でたのが、升を買ったことによって心境の変化を来してとりやめた、というのです。

この芭蕉の行動について、住吉大社編（二〇〇二）『住吉大社〈改訂新版〉』では、四天王寺女子大学教授の富山秦氏の解釈を引いて、以下のように説明する。

芭蕉が升を買ったのは事実であるが、「分別かはる」とはじつは事実ではなく虚構である。『笈日記』の中に門人の各務支考が、その日の芭蕉の行動を記しているところによると、昼頃より雨が降って、ことに日暮悪寒になやまされ、いそいで帰ったようで、雨が降るくらいであるから月も明らかでなかったろう。身体の不調や天候で月見を取りやめたのでは詩にはならない。升を買った結果、急に世帯気がついて月見をやめたといえば、そこに笑いがある。この笑いは「興の詩情」である。つまり、升を買うことは風流とはおよそ縁遠い世俗の行為であるが、ことさらに世俗の行為に及んで庶民性の中に自ら分け入るところに詩興の実践があり、升を買ったことを月見のとり止めの理由のように言いなしたところが興詩の創作である、というのである。

③汐掛道の記


汐掛道の記

平成二年十一月六日建立
財団法人住吉名勝保存会
理事長 高野光男
設計施工 ㈱大阪美術設計
石工 川端造園石材㈱

岸の駒松
汐掛道

【碑面】

すみのえの　粉浜のしじみ
開けも見ず
こもりにのみや　恋ひ渡りなむ
万葉集　読人知らず

【副碑上部】

汐掛道の記

ここは昔、住吉大社の神事の馬場として使われた場所で、社前から松原が続き、すぐに出見（いでみ）の浜に出る名勝の地であった。

松原を東西に貫く道は大社の参道で、浜で浄めた神輿が通るため「汐掛道」と称され、沿道の灯籠は代々住吉家当主の寄進になり、遠近の参詣や行楽の人々で賑わった。

古くから白砂青松の歌枕の地として知られ近世には多くの文人・俳人がここを往来し、大阪文芸の拠点の一つとなっていた。

財団法人住吉名勝保存会

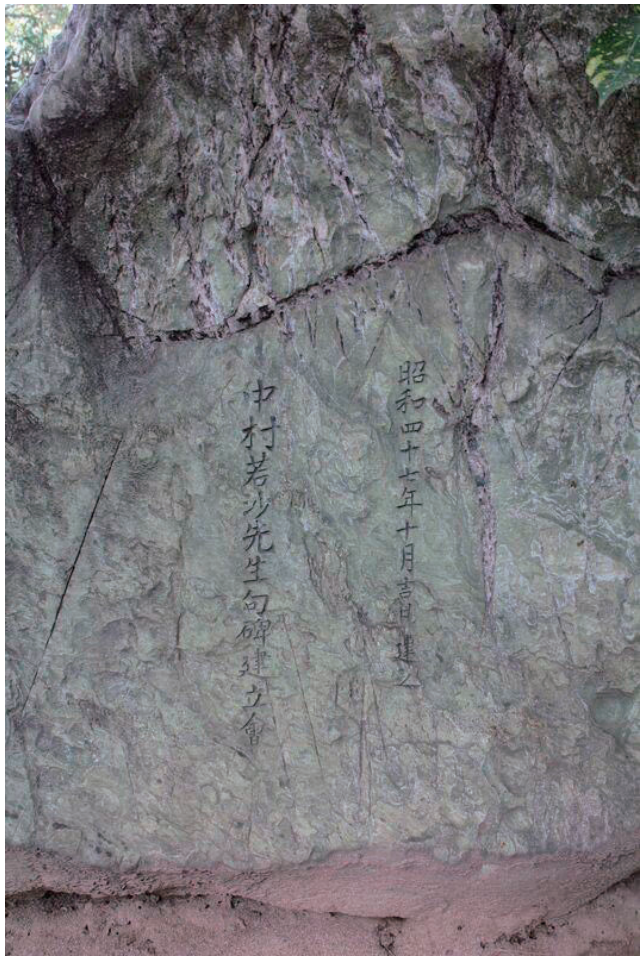
【副碑背面】

平成二年十一月六日建立
財団法人住吉名勝保存会
理事長　高野光男
設計施工㈱大阪美術設計
石工　川端造園石材㈱

【出典】

万葉集　巻六　九九七
住吉乃粉濱之四時美開藻不見隠耳哉戀度南

④中村若沙句碑



【碑面】

若沙

初夢の
あまたの
歌の神に
逢ふ

【裏面】

昭和四十七年十月吉日建之
中村若沙先生句碑建立会

【略伝】

中村若沙（なかむらじゃくさ）　明治二十七年二月十八日、愛知県岡崎市康生町にて父百合之允の長男として医家に生まれる。大正三年大阪医科大学（阪大前身）予科に入学。大正十年大阪医科大学卒業。その間発足した医大俳句会にて句作に励み、大正十年に「ホトトギス」雑詠に初巻頭を占む。大正十一年十二月「山茶花」が創刊され、初学欄を担当する。大正十五年財団法人山口厚生病院外科医長兼務。昭和五年医学博士の学位を取得。医学部講師となる。昭和六年六月より「山茶花」の編集及発行人名儀となる。青畝、木国、桜坡子、爽雨、誓子、草城、梅史、鹿郎、夜半、旭川、一杉、白楢、暁水らと「無名会」を興しメンバーとなる。昭和十年大阪北区に病院開設。昭和十四年「山茶花」の雑詠を桜坡子、爽雨、木国らと四名にて選者となる。昭和十九年、「山茶花」が俳誌統合で廃刊したので「磯菜」を創刊す。昭和五十三年二月二十八日脳梗塞症にて死亡、享年八十四歳。洗礼名「アレクセイ」、吹田市大阪ハリストス正教会にて葬儀並びに告別式。宝塚市宝梅町の墓所に埋骨。（『大阪の俳人たち　1』より）

【出典】

不明。

⑤高木石子句碑

【碑面】
住吉の
松にちりばめ初霰
石子

【裏面】
高木石子
住吉大社献詠選者
俳誌未央主宰
ホトトギス同人
一九八七年十一月二十三日
未央同人会建立

【建立の経緯】
『すみのえ』（一九八八年、一八七号）における本句についての特集には以下のようにある。

高木石子
句碑建立

十一月二十三日の新嘗祭の佳日に、住吉大社境内表神苑に於て、俳誌「未央」主宰の高木石子氏の句碑建立除幕式が行われた。

氏はお若い頃大阪商船㈱に勤めておられ、俳句を中村若沙氏に師事、永年中村氏の「磯菜」同人として活躍され、中村氏歿後はその跡を継ぎ誌名を「未央」と改め主宰となられ、又師が住吉大社献詠俳句の選者であった為これもお願いした方である。

氏は昭和五十八年より毎月住吉公園にて句会を催し、住吉大社や住吉公園の風趣や神事が好個の句材となり数多くの俳句が作られ、住吉句会も五十回も数えました。これを記念して「松苗新集」を刊行するとともに、門下の吉年康次氏が発起人となり、未央同人によって高木石子句碑が建立奉納された。

句は写真の通り奈良時代の萬葉集にも多く詠まれている名勝の松に因んだ句で、住吉句会にて作られた作品です。境内の松尾芭蕉の句碑、蜀山人の歌碑、藤沢南岳・川端康成の文学碑などと共に敷島の歌の神様の御神徳発揚に寄与することであろう。

⑥阿波野青畝句碑

【碑面】
松苗や
高知る
千木に
まで
のびむ
青畝

【裏面】
奉納　阿波野青畝
有志代表　松本　平
金工　羽原一陽
石工　庵治　三幸石材株式会社
昭和六十一年四月去日　建碑

【出典】

阿波野青畝（一九三九）『阿波野青畝全句集』花神社

【略伝】

阿波野青畝（あわのせいほ）　明治三十二年（一八九九）二月十日、奈良県高市郡高取町大字上子島に父橋本長治、母かねの五男として生まる。本名は敏雄。小学校入学のころから中耳炎にかかり、その後難聴。特に左耳が遠い。県立畝傍中学三年のとき「ホトトギス」の読者となり、原田浜人に師事。五年生のとき、浜人居にて西下中の虚子に初対面。この年、「ホトトギス」初入選。大正十二年、大阪の阿波野家に入る。翌年、「ホトトギス」の課題句選者となる。昭和四年、郷里大和から創刊の「かつらぎ」主宰となる。同年「ホトトギス」同人。昭和十四年ごろ連句に熱中。昭和二十年三月、空襲により本宅焼失、以後、兵庫県西宮市甲子園に住む。古俳諧のよろしさを現代に生かす稀有の作風を樹立。「あまたの経験に基づく写生」を主張し、高齢化とともに自由無碍の境地に入る。蛇笏賞、大阪市芸術賞、兵庫県文化賞・勲四等瑞宝章を受けた。俳人協会顧問、日本伝統俳句協会顧問、大阪俳人クラブ初代会長、大阪俳句史研究会顧問。連句協会顧問。（安達しげを他（一九八九）『大阪の俳人たち　1』）

【建立の経緯】

本句碑について雑誌『すみのえ』（一九八六年、一八一号）に敷田権宮司の書いた記述がある。

阿波野青畝句碑建立

去る四月二十七日日曜日に当社に於いて写真の句碑の除幕式があった。奉納されたのは、関西俳界の最長老大御所阿波野青畝氏である。

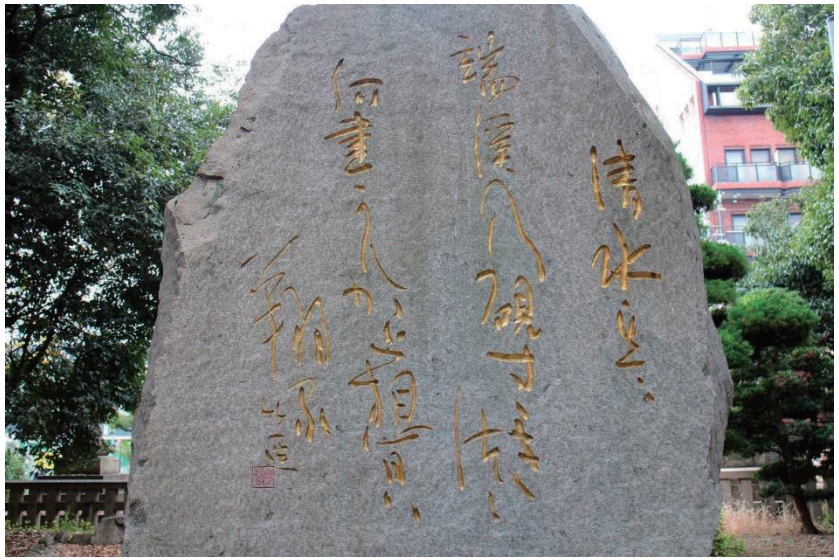
氏は奈良県高市郡高取町の生れで大正七年県立畝傍中学を卒業、高浜虚子に師事、長年「ホトトギス」の同人として活躍、昭和四年俳誌「かつらぎ」創刊以来、主宰として多数の門下を育てられている。また、戦後住吉大社献詠俳句の選者として奉仕して来られた方である。

この句碑は、今年米壽八十八歳になられたのを記念して、門下の松本平氏他「かつらぎ」社中の人等によって奉納建立された。場所は正面参道反橋前神馬舎裏の神苑で、

松苗や
高知る
千木に
まで
のびむ

と、松の名所住吉大社に因んだ句で、境内の松尾芭蕉の句碑、蜀山人の歌碑其他数々の碑と共に文学の神様の御発揚に寄与することであろう。

⑦宮本竹逕歌書碑



【碑面】

清水もて
端渓の硯すゝきつゝ
何書かんかと想ひは
翔る

竹逕

【裏面】

清水もて端渓の硯
すすぎつつ何書かん
かと想ひは翔る
歌　書
竹逕　宮本顕一
平成四年十一月吉日建之
宮本竹逕先生傘寿歌碑建立委員会
寒玉書道会
書芸公論社
昭和六十一年歌会始詠進歌

【裏面下部】

施工　㈲額田石材
畔柳寛次
刻者　中根石材店
中根義朗

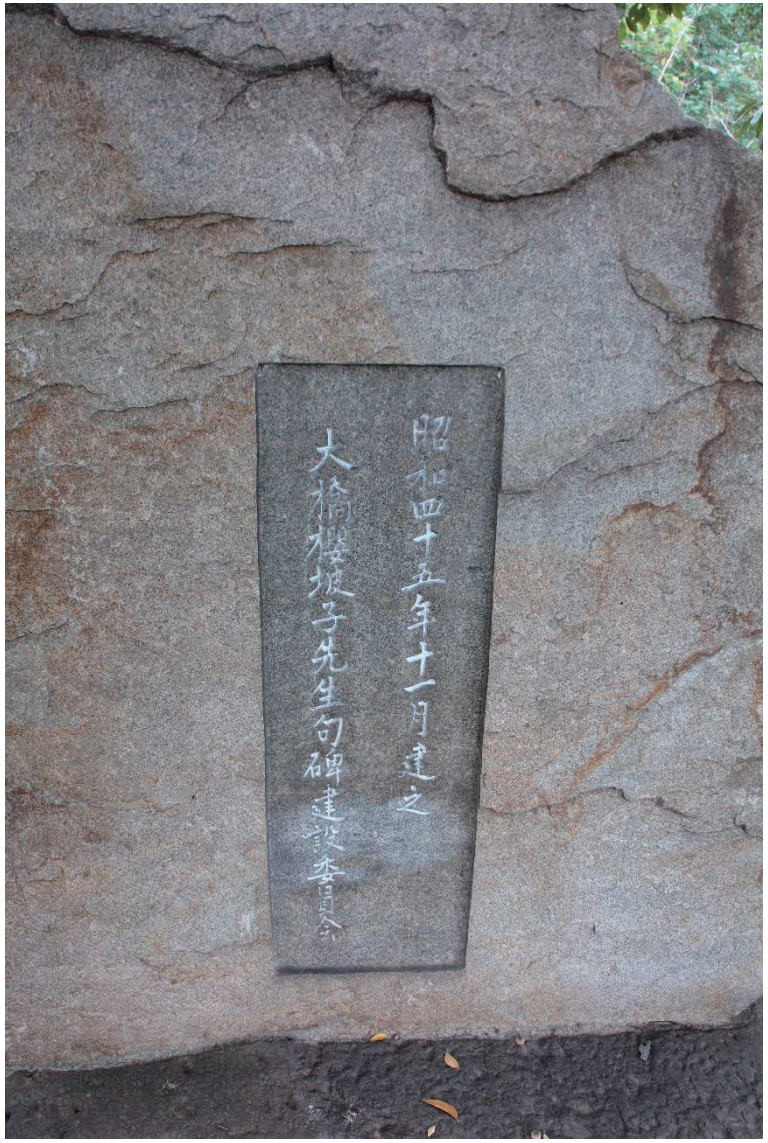
【出典】

昭和六一年歌会始お題「水」にて詠まれた歌。
宮内庁のウェブページに記載あり。
〈http://www.kunaicho.go.jp/culture/utakai/utakai-s61.html〉

【略伝】

宮本竹逕（本名：宮本顕一）は一九一二年九月二五日広島県沼隈郡赤坂村（現福山市赤坂町赤坂）に生まれ、二一歳で広島県師範学校卒業、二七歳で戦前の文部省検定試験（習字科）に合格し、かなを桑笹舟に漢字を炭山南木に師事、かな作家の道を歩みだした。一九五〇年にはそれまで誰も注目しなかった関戸本古今集を研究し、この倣書風の小字がなで日本美術展覧会（日展）の特選を受賞し書壇としての一歩を歩みだす。一九五七年より日展審査員五回歴任、一九六七年には文部大臣賞を受賞後、二〇〇二年九一歳で没するまでに、日展評

議員、日本書芸院顧問、和様書作家協会事務局長、一楽書芸院副会頭、書芸公論編集、寒玉会主宰を務めた。一九八六年七四歳の時に新年歌会始召人に選ばれ、一九九二年には大阪市住吉大社に新年歌会始召人詠進歌碑建立された。ふくやま書道美術館に多く作品が収蔵されている。



⑧大橋桜坡子句碑

【碑面】
桜坡子
住吉に
歌の神あり
初詣

【裏面】
昭和四十五年十一月建之
大橋桜坡子先生句碑建設委員会

【出典】
大橋英次（一九三八）『句集雨月』句集「雨月」刊行会

【略伝】
大橋櫻坡子（おおはしおうはし）　明治二八年六月二九日滋賀県伊香郡木之本村に生る。本名英次。大正三年敦賀商業卒。同時に住友電線製造所に入社。大正二年敦商の学生時代より旧派紫雲亭藤月宗匠に就き句作を始む。六年二月高濱虚子の謦咳に接し、虚子の指導を受け、淀川俳句会を創立す。一一年「山茶花」創刊され、その同人たり。昭和二年誓子、青畝、夜半、木国、爽雨、梅史、草城、一杉、鹿郎、若沙、暁水らと無名会を興す。七年「ホトトギス」同人。一一年爽雨、木国、若沙らと「山茶花」の選者。一九年戦時下俳誌統合により「山茶花」廃刊。二二年名古屋に転勤。二四年「雨月」創刊。二五年住友電工定年退職。二九年吹田市千里山に帰阪。三八年俳人協会創立と同時に評議員。四六年一〇月三一日死去。句風は生涯高濱虚子の「花鳥諷詠」客観写生の道を遵守す。（大阪俳句史研究会（一九九五）『大阪の俳人たち4』）

⑨都鳥社歌碑

【碑面】

都鳥社

敷島のみちひの玉は昔にも光いや増言の葉の神　菊山人

御け人も濁らぬ御代に住吉のすみわたりたるうき忘水　玉丸

わすれ草忘る程に年積て鶴も巣をくむ住吉の松　姫丸

敷島の道の栞は住吉の神か誓し松の言の葉　花弟丸

華盤のたまの数々つもりなるこのさしひきすみの江の宮　賤丸

千代迄も栄る松の言の葉をかき残し置住吉の岸　むら丸

御宝の玉手の岡に人みちて干る事しらぬ住よしの宮　七宝丸

畏き神の御末にて世は住吉の浦安の国　都柳軒

訪（跡書？）れていく代長狭に住の江やみいつもたかき四柱の神　田鶴丸

【裏面】

執次

田中直衛

明治廿六歳在癸己六月

奉納之

柳原庄左衛門㊞

今田赤翁㊞

新町七宝亭㊞

村井松之助㊞

新宮東祐㊞

西田清七㊞

姫田音助㊞

朝井松之助㊞

菊山徳兵衛㊞

【出典】

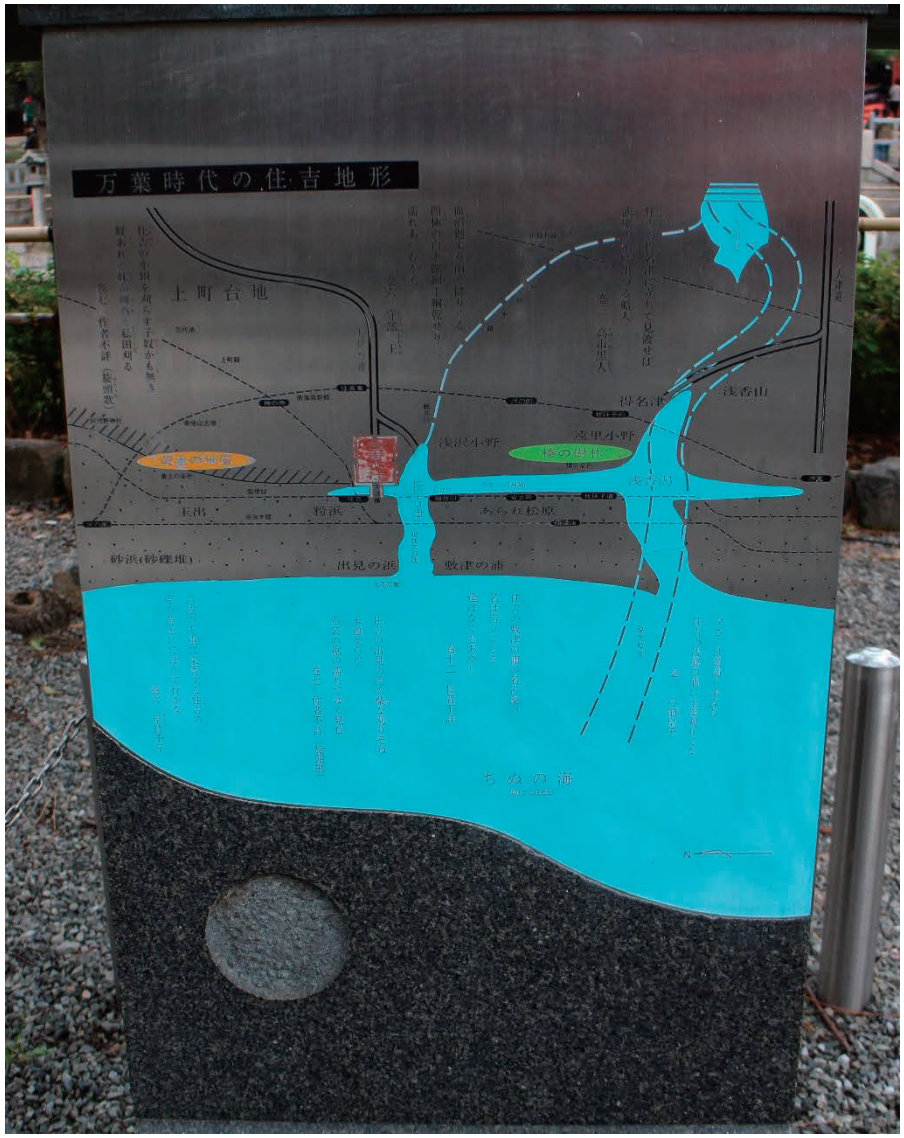
不明。

⑩住吉万葉歌碑

【碑面上部】

住吉に斎く祝が神言と
行くとも来とも船は早けむ
巻十九　多治比真人土作、遣唐使に餞する歌

草枕旅行く君と知らませば
岸の黄土ににほはさましを
巻一　清江娘子、長皇子に進る歌



【碑面下部】（地図上に在歌）

万葉時代の住吉地形

住吉の得名津に立ちて見渡せば
武庫の泊ゆ出づる船人

巻三　高市黒人

血沼廻より雨ぞ降りくる
四極の白水郎網手綱乾せり
濡れあへむかも

巻六　守部王

住吉の小田を刈らす子奴かも無き
奴あれど妹か御為と私田刈る

巻七　作者不詳（旋頭歌）

夕さらば潮満ち来なむ
住吉の浅鹿の浦に玉藻刈りてな

巻二　弓削皇子

住吉の敷津の浦の名告藻の
名は告りてしを
逢はなくもあやし

巻十二　作者不詳

住吉の出見の浜の柴な刈りそね
未通女らが
赤裳の裾の濡れてゆく見む

巻七　作者不詳（旋頭歌）

白波の千重に来寄する住吉の
岸の黄土ににほひて行かな

巻六　車持千年

【裏面上部】

住吉の遠里小野の真榛もち摺れる衣の盛り過ぎ行く　巻七　作者不詳

住吉の岸の松が根うちさらし寄せ来る波の音の清けさ　巻七　作者不詳

馬の歩み押さへ止めよ住吉の岸の黄生ににほひて行かむ　巻六　安倍豊継

住吉の浅沢小野のかきつばた衣に摺りつけ着む日知らずも　巻七　作者不詳

【裏面下部】

暇あらば拾ひに行かむ住吉の岸に寄るとふ恋忘貝　巻七　作者不詳

住吉の里行きしかば春花のいや愛らしき君に逢へるかも　巻十　作者不詳

住吉の岸を田に墾り蒔きし稲のさて刈るまでに逢はぬ君かも　巻十　作者不詳

住吉の波豆麻の君が馬乗衣さひづらふ漢女をすゑて縫へる衣ぞ　巻七　作者不詳（旋頭歌）

【前面下部】

住吉万葉歌碑

この歌碑は建立趣旨賛同の一般応募者や万葉愛好家および「難波万葉と古代を歩く会」会員など多数有志によって建立されたものである。海浜の美しい景観と港の活況を誇ったこの住吉には万葉人たちが住吉大社参詣の任務を兼ねて度々訪れ、数多くの万葉歌を遺した。その中から17首を採録し、併せて万葉時代を推定する住吉地形図を刻した。また、港にふさわしい表象として古代船を配した。

この歌碑が万葉の宝庫である当地の新たな記念碑となり、多くの人に親しまれることをここに念願するものである。

なお、この台下に〈30世紀へのメッセージ〉を埋蔵する。

平成3年（1991）5月15日

発起人

住吉大社宮司　奥野茂壽
難波万葉と古代を歩く会代表　金子　晋
万葉地形原図　立命館大学教授　日下雅義
碑デザイン　造形作家　今井祝雄
製作施工　紋郎美術工房

【右側面】

３０世紀へのメッセージ
タイムカプセル
歌碑の台下に〈３０世紀へのメッセージ〉を収納するタイムカプセルを埋蔵する。
これは、私たちが現代に生きた証を１０００年後の人類に贈ろうとする貴重なメッセージであり、また、３０世紀の人類に私達が検証されるであろう重要な人間資料である。
世界が永久に平和であることを祈り、１０００年後もこの歌碑が健在であることを願って、ここに多数応募者のメッセージを収納する。

開封　２９９１年５月１５日

【主な収納作品】
１　応募者から寄せられた文章・詩歌・絵画・写真など
２　英訳万葉秀歌「万葉・その愛と人間」
３　記録〈現代の私達はこんな生活をした〉
　Ａ　文字表現編　Ｂ　映像表現編
　Ｃ　音声表現編　Ｄ　統計表現編
４　未来座談〈私たちが予想する３０世紀〉

【タイムカプセル】
長方体型　銅製

【収納方法】
窒素ガス充填による
塩化ビニール包装

【左側面】

碑形　出土埴輪古代船と角柱
天然の良港に恵まれ、往古から国内外の船舶の出入りで賑った港住吉を記念して古代船をこの歌碑の表象とした。

この古代船は、大阪市平野区長原遺跡から出土した5世紀初めの船形埴輪をモデルに、原形の約2倍の大きさで制作したものである。
この船を中空に支える形で、万葉歌と住吉古代地形図を刻した角柱碑が垂直に建つ構成とした。

【古代船】
２４０×７０×６０ｃｍ　ブロンズ
【角　柱】
２４４×５０×４０ｃｍ　御影石　ステンレス
【碑文台】
５０×５０×５０ｃｍ　御影石　ステンレス

【建立の経緯】

『すみのえ』（一九九一年、二〇一号）に次のように記述がある。

☆住吉万葉歌碑建立除幕式

住吉大社境地、反橋の北直ぐ脇に、「住吉万葉歌碑」が建立され、平成三年五月十五日、盛大除幕式が執り行われました。発起人は犬養孝（大阪大学名誉教授）・奥野茂壽（住吉大社宮司）・金子晋（難波万葉と古代を歩く会代表）・日下雅義（立命館大学教授）今井祝雄（造形作家）の各氏で、主に「難波万葉と古代を歩く会」の会員の方々により、準備が進められてまいりました。高さ二百四十四㎝の角柱にブロンズの長原遺跡出土船形埴輪をモデルとした古代船を配置し、「住吉に斎く祝が神言を行くとも来とも船は早けむ」の歌等十七首が誰にでも読める活字で刻まれております。歌碑の台の下には二十世紀に生きた証を伝える爲、千年後にも生きていたいと未来に夢を乗せて〈三十世紀へのメッセージ〉タイムカプセルを設けました。

【出典】

すべて万葉集の歌である。

碑面上部

住吉尓伊都久祝之神言等行得毛来等毛舶波早家无（巻十九　四二四三）
草枕客去君跡知麻世婆崖乃埴布尓仁寳播散麻思呼（巻一　六九）

碑面下部

墨吉乃得名津尓立而見渡者六兒乃泊従出流船人（巻三　二八三）
従千沼廻雨曽零来四八津之白水郎網手乾有沾将堪香聞（巻六　九九九）

住吉小田苅為子賤鴨無奴雖在妹御為私田苅（巻七　一二七五）
暮去者塩満来奈武住吉乃淺鹿乃浦尓玉藻苅手名（巻二　一二一）
住吉之敷津之浦乃名告藻之名者告而之乎不相毛恠（巻十二　三〇七六）
住吉出見濱柴莫苅曽尼未通女等赤裳下閏将往見（巻七　一二七四）
白浪之千重来縁流住吉能岸乃黄土粉二寶比天由香名（巻六　九三二）

裏面上部

住吉之遠里小野之真榛以須礼流衣乃盛過去（巻七　一一五六）
住吉之岸之松根打曝縁来浪之音之清羅（巻七　一一五九）
馬之歩押止駐余住吉之岸乃黄土尓保比而将去（巻六　一〇〇二）
墨吉之淺澤小野之垣津幡衣尓揩著将衣日不知毛（巻七　一三六一）

裏面下部

暇有者拾尓将往住吉之岸因云戀忘貝（巻七　一一四七）
住吉之里行之鹿齒春花乃益希見君相有香聞（巻十　一八八六）
住吉之岸乎田尓墾蒔稲乃而及苅不相公鴨（巻十　二二四四）
住吉波豆麻公之馬乗衣雑豆臈漢女乎座而縫衣叙（巻七　一二七三）

⑪海竜王処碑

【碑面】

海竜王処

大阪府知事渡辺昇書（在印）

玉出与里爰二移志弖

功奈紀加美濃神門屋

立栄由良無

宮司従五位津守国美（在押）

【側面】
発起人
早川兼松
松本勇七
取次人
大阪■■■
■■■■
小山■■

【裏面】
大阪府下
北新地　席貸　芸娼　諸商人　信者中
席貸取締
〔人名等〕
紀元弐千五百三十九年明治十二年卯三月

【出典】
不明。

【略伝】
津守国美は津守家第七十四代神主として住吉大社の隆盛に努めた人物である。中古から中世において勤皇家や歌人として知られた津守家の家名を幕末・明治の動乱期に見事守り抜いた。津守国美の歌が入った歌集は大阪・京都を中心とする旧派歌人と結社の歌集で、配り本と思われるものが多いが、京都の近衛忠熙卿に和歌を学んでいた国美は公家流のなだらか平明な調子の和歌を詠んでいる。歌人として名高く、和歌の神である住吉大社の神主であった津守国美と交流を求める旧派歌人は多かったのではないかと菅宗次氏は『すみよし』において述べている。また近世後期の津守家は和歌に秀れた人が多く、中でも津守国礼（七十二代）は京都の賀茂季鷹の門人で著名である。

井原西鶴は住吉の社頭で
一日一夜大矢数二万三千五百
の独吟を行なったその記念す
べき地に西鶴の真蹟をもって
句碑を建てる
昭和十三年三月三日
谷崎潤一郎

⑫井原西鶴句碑

【碑面】
むかし男の詠め捨てしかた野の花にゆきて
何と世に桜も咲す下戸ならは　西鶴

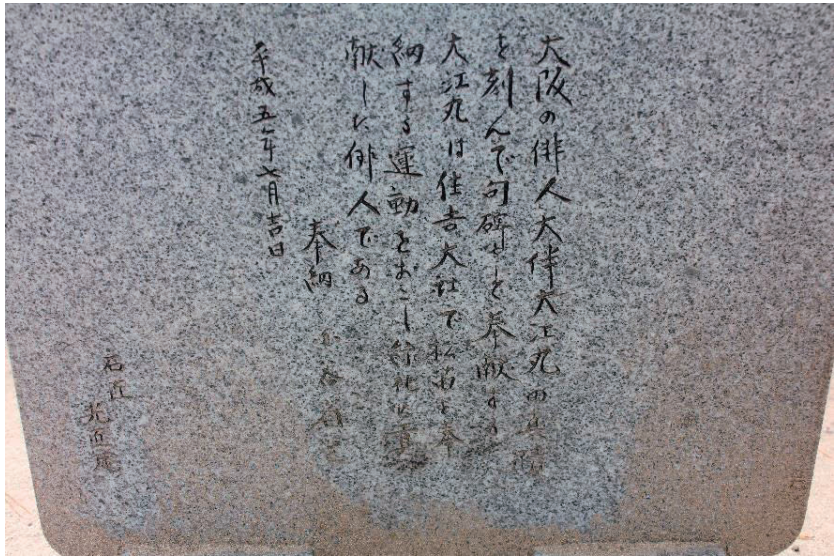
【裏面】
井原西鶴は住吉の社頭で一日一夜大矢数二万三千五百句の独吟を行なった。その記念すべき地に西鶴の真蹟を写して句碑とする。
昭和五十五年三月二十六日
奉建　小谷省三

【出典】
天理図書館が真蹟の短冊を所蔵。

西鶴得意の発句と見えて、少し詞書を異にする真蹟短冊が他にも多く伝在する。例へば早稲田大学図書館水口文庫のものなど。句は片岡旨恕著貞享四年丁卯九月十一日奥好色旅日記巻二第五丁裏に見える。なほ大田南畝の一話一言巻一に「西鶴句」として引く「なへて世に桜かさかす下戸ならは」はこの句の誤伝か。（天理図書館（一九六五）『西鶴』）

『好色旅日記』の文中に、渚の院で業平が有名な歌「世の中に絶えて桜のなかりせば春のこころはのどけからまし」を詠んだことを想起した記事があり、そこにこの句が記載されている。その古歌は春の心の楽しさを逆説的に表現しているのだが、本句はむしろ、この春はつまらないというのである。（吉江久彌（二〇〇八）『西鶴全句集』）

⑬大伴大江丸句碑



【碑面】

けいせいの
おや里も今
さくら哉

八十五才　大とも大江丸（在印）

【裏面】

大阪の俳人大伴大江丸の真蹟を刻んで句碑として奉献する。大江丸は住吉大社で松苗を奉納する運動をおこし、緑化に貢献した俳人である。

奉納　小谷省三

平成五年七月吉日

石匠　光匠庵

【出典】

章末に挙げた参考資料にあたったが、本句に関する情報は一切認められなかった。

文入（一九五九）には、「彼の句は殆ど『俳懺悔』『はいかい袋』に見えるものであり、『松苗集』によって加えられるところは少ない」とあるが、『俳懺悔』は寛政二年（一七九〇・大江丸六九もしくは七〇歳）、『はいかい袋』は享和元年（一八〇一・大江丸八〇歳）の出版であることから、碑の情報に従えば、これらの句集によるものではないと思われ、住吉大社に句碑が建立されていることを考えると、『松苗集』（江戸時代・天明七年（一七八七）～文化七年（一八一〇））に収められた句であるのではないだろうか（編集者）。真弓（二〇〇三）『住吉信仰』では、松苗集について以下のように説明されている。

『松苗集』十三冊は、献木の松苗に添えた献詠の歌句です。古来、歌枕となり、神のしるしともされた「住吉の松」が、天明年間（一七八一～八八）枯れるきざしを見せたことがありました。このとき風流人の間に期せずしておこったのが松苗奉納の企てで、俳人加部仲ぬりの妻吉女が、大伴大江丸とはかって、松苗の献木を斡旋し、それに添えて献詠の歌句を求め、奉納したものです。

〈中略〉

これは現に「住吉御文庫」に保存されています。

また、これを記念して俳句の献詠と松苗の献木を行う「松苗行事」は、毎年四月三日に現在も行われています。

【略伝】

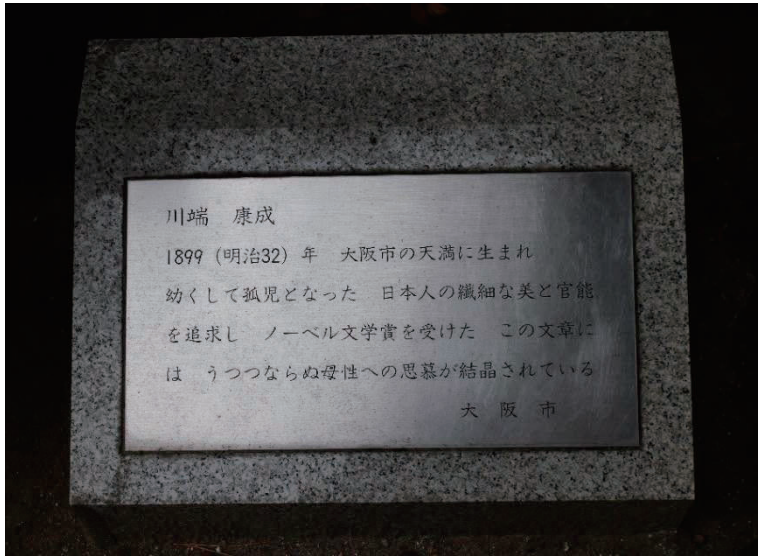
享保七年（一七二二）壬寅の十月五日戌刻、大阪高麗橋一丁目南浜側の家に生まれた。道頓堀で知られる安井道頓の血をひき、安井氏の六代目にあたる。名は政胤、通称は大和屋善右衛門。幼名を利助、隠居したのちは宗二という。俳号は最初に芥室(かいしつ)、旧国（旧州）と改め、のちに大伴大江丸を名乗る。文化二年（一八〇五）年三月一八日没。享年八四歳。享年に関しては八六歳説、歳説などがあるが、自ら書記した稿本『きのふの吾』に従い八四歳と考えるべきである。

俳歴は『きのふの吾』に「二十歳　元文六年　辛酉　此此活々坊へ入門して芥室と号」とあるにはじまる。が、『はいかい袋』には、十二、三歳の頃、鳴海の千代倉鉄叟の依頼で、半時庵淡々に状を届けたことから、半時庵に折々通い、「此道覚ゆべしとも思はで、只おもしろく賑やかに有しになづみ参し」とあり、また「大江丸が江戸堀にて相見せしは元文之初、翁六十四歳也し」と淡々と回想していることからみて、享保末、元文初年から、俳諧に興味をもったことがわかる。

⑭川端康成碑

友橋は上るよりも
おりる方がこはいもの
です
私は母に抱かれて
おりました
川端康成「友橋」より

昭和56年3月
大阪市文学碑


川端　康成
1899（明治32）年　大阪市の天満に生まれ
幼くして孤児となった　日本人の繊細な美と官能
を追求し　ノーベル文学賞を受けた　この文章に
は　うつつならぬ母性への思慕が結晶されている
大　阪　市

【碑面】
反橋は上るよりも
おりる方がこはいも
のです
私は母に抱かれて
おりました
川端康成「反橋」より
川端康成

【裏面】
昭和５６年３月
大阪市文学碑

【副碑】
川端康成
１８９９（明治３２）年、大阪市の天満に生まれ、幼くして孤児となった。
日本人の繊細な美と官能を追求し、ノーベル文学賞幼くして孤児となった。日本人の繊細な美と官能を追求し、ノーベル文学賞を受けた。この文章には、うつつならぬ母性への思慕が結晶されている。
大阪市

【小説「反橋」について】

新潮社による『川端康成全集第七巻』三七五頁六行目に当該部分は掲載されている。巻末で、小説「反橋」について以下のように説明されている。

「別冊風雪」創刊号（昭和二十三年十月十五日刊）に、「手紙」と題して発表された。同誌の創作欄は他に「縁切りの章」（舟橋聖一）、「アリマンの村」（楢戸運二）、「亡友」（井伏鱒二）、「雁帰る」（田村泰次郎）、「うしろ姿」（真杉静枝）、「妖呪」（北川晃二）、「奇童」（中山義秀）が掲載された。創作八篇だけが収められた号である。

『哀愁』（細川新書５）（昭和二十四年十二月十日、細川書店刊）に、「反橋」と題を改めて、初めて収められた。

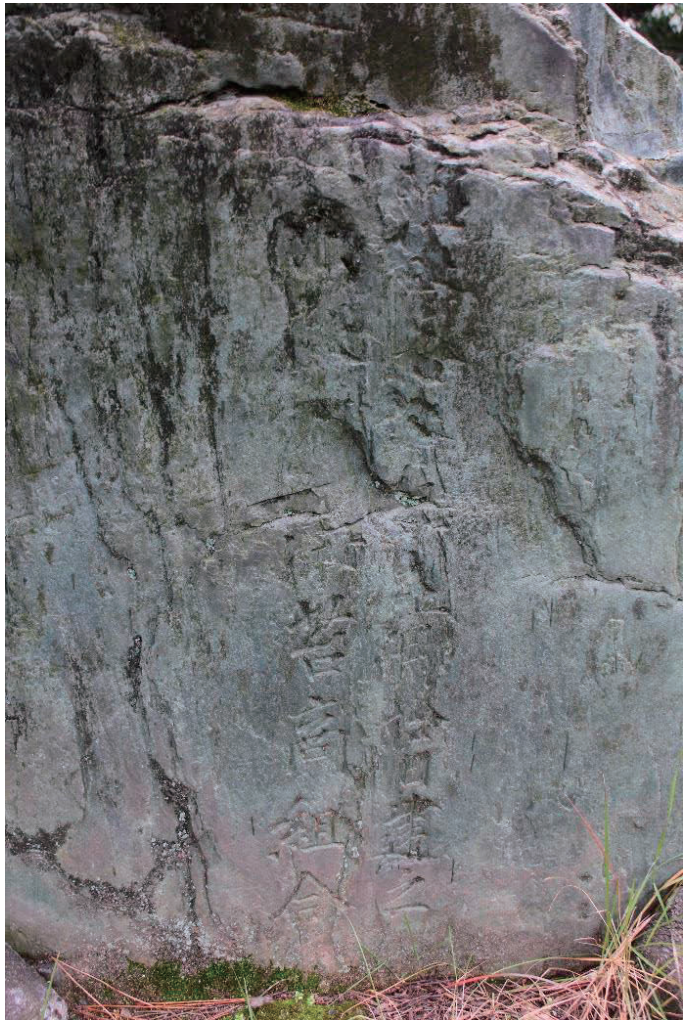
本全集では、新潮社版十九巻本全集の第七巻（昭和四十五年一月二十五日刊）を底本として用ゐ、初刊本を参照して、本文を作成した。

【橋梁の反橋について】

大阪市立美術館編（二〇一〇）では反橋について以下のように説明している。

正面の神池に架けられた神橋は、俗に太鼓橋と呼称されますが、正式には「反橋」といいます。石造の橋脚は慶長年間に淀君の奉納によるものと伝えられ、半円形の大きな傾斜をもつ反橋を渡るだけで「おはらい」になるとの信仰もあり、参詣者の多くがこの橋を渡ります。

⑮津守国美歌碑



【碑面】
幾千世も
むつひかはして
二本の
松の緑は
栄えゆくらん
七十一老
正四位国美書（在印）

【裏面】
【剥落】三月拾日建之
【剥落】海苔商組合

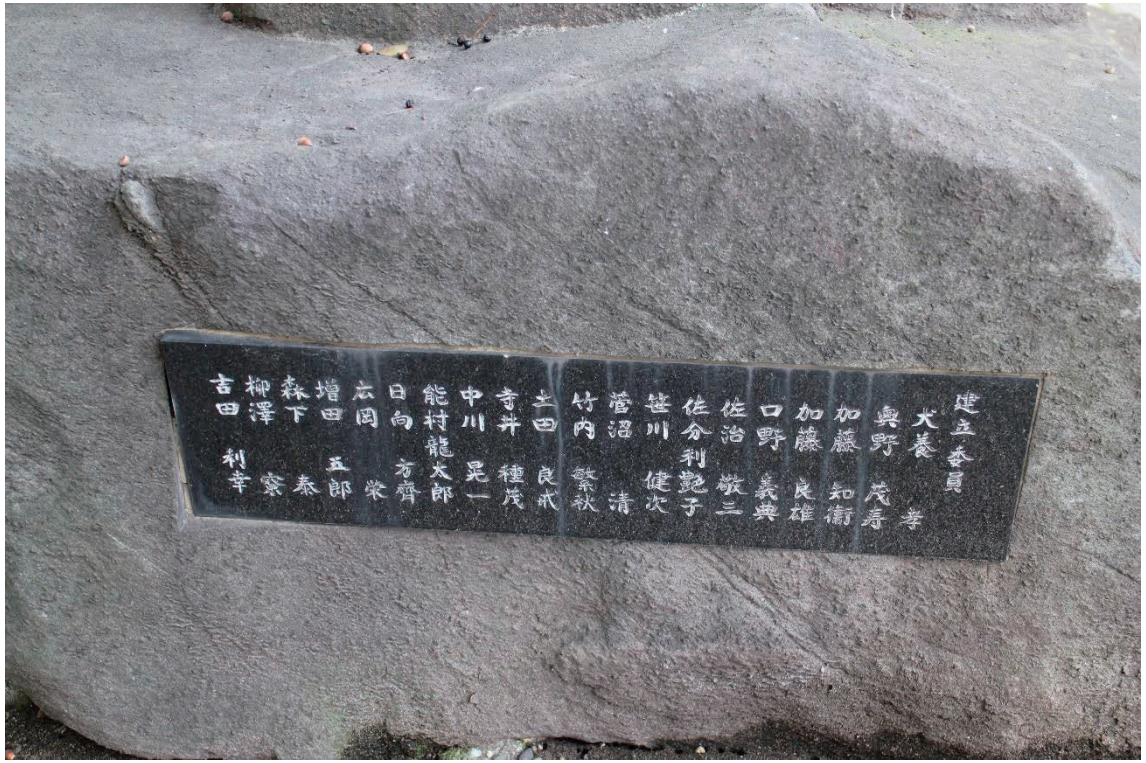
【出典】
不明。

【略伝】
「⑪海竜王処碑」を参照。

⑯天皇陛下御在位六十年奉祝記念碑

【碑面】
御製
いくさのあと
いたましかりし町々も
わか訪ふことに
立ちなほりゆく

【碑台】
天皇陛下御在位六十年奉祝記念碑



【裏面】

御製は、昭和三十一年関西に御巡幸あそばされたときに詠まれたものである。
戦後（大東亜戦争）瓦礫の中に焼け出された人々は、急造のバラックに雨露をしのぎ、深刻な食料難に飢え、戦争は終わったとはいえ辛く悲しい日々が続いていた。
そのような時、天皇陛下は国民を慰め、励まされるため、全国御巡幸に旅立たれ、大阪でも親しく府民をお励ましになった。その後、わずか十年にして見事に立ち直りつつある大阪府民の活力を愛で、励まし給うた。
天皇陛下御激励の御心を深く体し、更に精励努力、大阪の繁栄に寄与する決意を永く後世に伝えるため「天皇陛下御在位六十年奉祝」の年を記念しこの碑を建立する。

昭和六十一年十一月

建立　天皇陛下御在位六十年奉祝大阪実行委員会会長勲一等　若槻哲雄
御製題字揮毫　芸術院会員　村上三島
撰文　津村忠臣
施工　藤本石材店

【碑台裏面】

建立委員
犬養　孝
奥野　茂寿
加藤　知衛
加藤　良雄
口野　義典
佐治　敬三
佐分利艶子
笹川　建次
菅沼　清
竹内　繁秋
土田　良戒
寺井　種茂
中川　晃一
能村龍太郎
日向　方齊
広岡　栄
増田　五郎
森下　泰

柳澤　寮
吉田　利幸

【左碑】
奉祝　御大典記念植樹

【左碑裏面】
御大典奉祝会
平成二年十一月吉日

【建立の経緯】
天皇陛下御在位六十年記念
御製碑建立
天皇陛下御在位六十年奉祝
大阪実行委員会より奉納

去る昭和六十一年十一月九日、天皇陛下が本年、御在位六十年をお迎えになられた事を記念し、御製碑が天皇陛下御在位六十年奉祝大阪実行委員会（会長若槻哲雄）により建立され、住吉大社に奉納されました。

御製は、

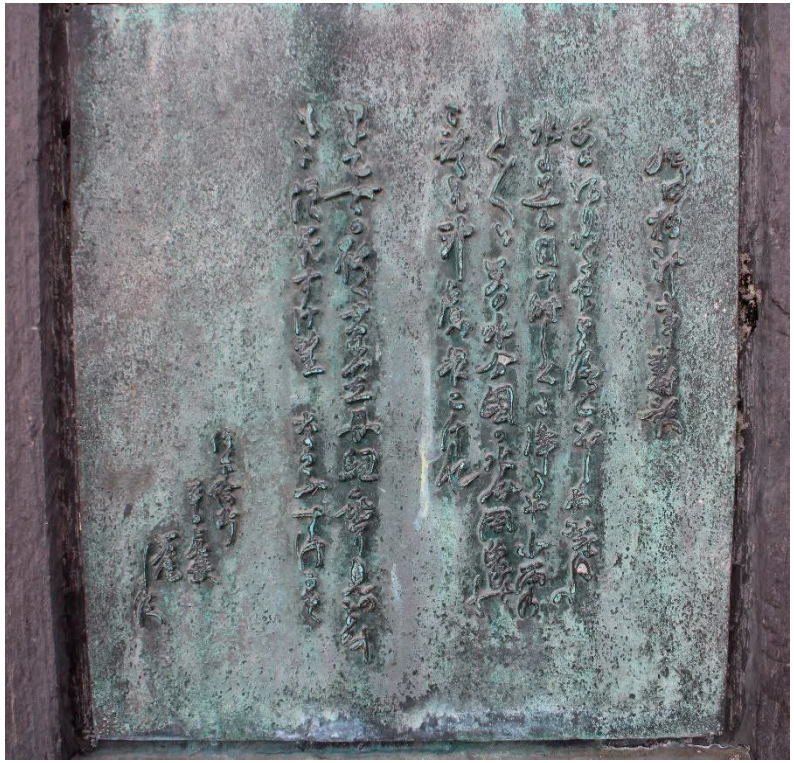
いくさのあといたましかりし町々も
わが訪ふごとに立ちなほりゆく

と、昭和三十一年関西御巡幸あそばされたときに詠まれたものです。

戦後瓦礫の中に焼け出された人々は、急造のバラックに雨露をしのぎ、深刻な食糧難に飢え、戦争は終ったとはいえ辛く悲しい日々が続いていました。そのような時陛下は国民を慰め、励まされるため全国御巡幸に旅立たれ、大阪でも親しく府民をお励ましになられました。その後、わずか十年にして見事に立ち直りつつある大阪府民の活力を愛で、励まし給うた陛下御激励の御心を深く体し、更に精励努力、大阪の繁栄に寄与する決意を永く後世に伝えるため、「天皇陛下御在位六十年奉祝」の年を記念し、御製碑が住吉大社境内の南手水舎南側に建立されました。

御製の揮毫は、書道家の村上三島先生によるもので、住吉の神苑にまたひとつ新しい名所が生まれました。

⑰安江不空歌碑



【碑面】

安江不空歌碑

あらありかたやよろこはしや水無月の
水も足らひて時しくに降るや小雨の
しく〳〵と天の水分國の水分罔象の
これそ神慮畏こけれ

早乙女の被く菅笠丹紐垂り見のよろし
もよ浪花すけ笠　ならふすけかさ

住吉絵所
平の真鉄
不空しるす

【裏面】

敬神尊皇の歌人にして住吉大社絵所預を奉仕せられし安江不空大人帰幽後十年を経たり不空会同人大人の徳を慕ひて志を結ひ歌碑建立の願望せつなるものあり

住吉大神は古来和歌の守護神に在し其神域をは先人悉く謹み畏みて憚り多き霊地なりとせり　さりながら大人神勤の功労に稽へ昭和卅年春　大人謹詠御田植神事寿歌の一節を小林美春氏彫金の銘版におさめ永く同神事の精神と意義を雅の和歌にて伝へ昂むるは御神慮に叶ひ奉るものと言ふへし

行幸啓を仰きたる光栄の年の夏日　神田の吉方乾の地を卜し御田植神事寿歌の石文を仰き

寿く
昭和四十五年夏八月吉日
住吉大社宮司高松忠清謹書

【裏面下部】
昭和四十五年十一月三日建之
不空会
万葉艸舎同門会
神道天行居
あけび歌会
施工
株式会社田中家

【略伝】

安江不空は、明治十三年（１８８０）一月二日に出生。父、安江静は元稲荷大宮司（当時大和広瀬神社宮司）である。明治三十一年１９歳の時に岡倉天心日本美術院を創設するや天心に従って美術院に入り研究部員となる。このとき、岡倉天心・橋本雅邦に指導を受ける。明治三十三年、不空２１歳の時の七月に正岡子規門に入る。後根岸短歌会の同人となる。明治三十九年２７歳の時、これまでの号「秋水」を廃し、はじめて「不空」の号を用いる。明治四十二年３０歳の時に都門を去り、大阪天下茶屋（無憂樹林、万葉艸舎）に住む。この年に林英代と結婚する。翌年に関西同人根岸短歌会発会式があり、妻英代との間に子供を授かる。大正四年、不空３６歳の時に父安江静が６８歳で逝去。大正十一年４３歳の時に当麻寺にて大作を揮毫し、翌年４４歳の時に大長歌「天殃行」が完成する。昭和三年４９歳の時に住吉小浜垣内に移り住む。昭和十九年６５歳で神道天行居の権中道士に任命される。昭和二十七年、不空７３歳の時に夫人英代が逝く（享年６３歳）。昭和二十九年、住吉大社の絵所預に任命される。昭和三十三年の７９歳の時に権大道士となる。昭和三十五年、３月２３日、安江不空長去、大道士に昇進する。８１歳の時である。

【補足情報】

あけび歌会（大阪）〈http://web1.kcn.jp/narakappa/index.html〉の安江不空プロフィール〈http://web1.kcn.jp/narakappa/yasuepro.html〉に以下のような記述がある。

・昭和４５年　住吉大社の歌碑建立
　６月１４日に住吉大社の「御田植神事」がある。約２０アールの御田の中央に舞台が設けられており、「植女」から「替植女」に渡された早苗が御田に植え付けられる。植え付けと並行して、舞台上では「田舞」次に「神(み)田代(としろ)舞(まい)」が奉納される。こ

の「神(み)田代(としろ)舞(まい)」の作詞が安江不空で、御田植神事寿歌と題する一連の歌の一部が使われている。不空全歌集ｐ３６４には全歌が収録されている。

歌碑の表面は次のとおりで、これも御田植神事寿歌の一部である。

御田植神事寿歌

「あら阿りがたやよろこばしや　水無月の水も足らひて時じくに降る雨や小雨のしくしくと天の水分国の水分罔(みづ)象(はめ)のこれぞ神慮(みこころ)畏こけれ

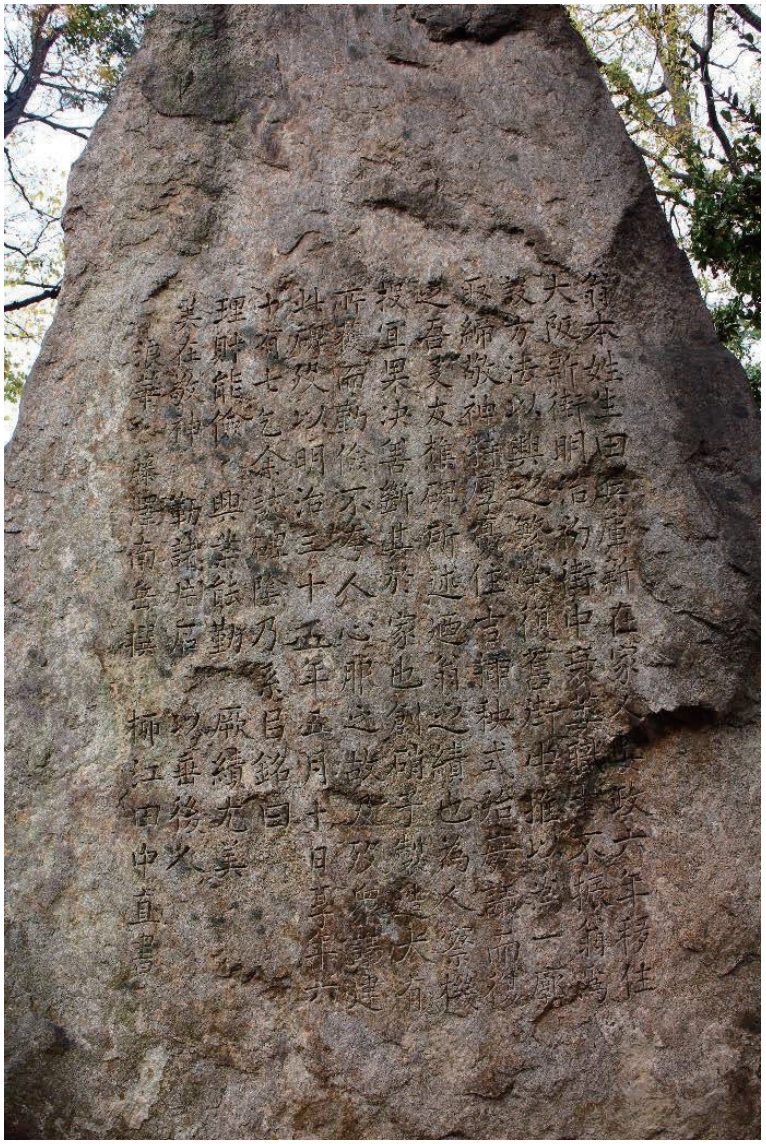
早乙女の被く菅笠丹(に)紐(ひも)垂り見のよろしもよ浪花すげ笠

住吉絵所

平の真鉄

不空記す

裏面には住吉大社宮司　高松忠清　謹書の銘文がある。



⑱木原茂平翁遺績碑

【碑面】
木原茂平翁　遺績碑

【裏面】
翁本姓生田兵庫新在家人安政六年移住大阪新街明治初街中衰萎職業不振翁為設方法以興之
繁栄復旧街中推以為一廓取締敬神特厚憂住吉挿秧式殆廃議而復之吾友友樵碑所述廼翁之績
也為人察機投宜果決善断其於家也創硝子製造大有所獲而勤倹不夸人心服之故及歿衆議建此
碑歿以明治三十五年五月十日享年六十有七乞余誌碑陰乃系曰銘曰
理財能倹　興業能勤　厥績尤美
美在敬神　勒諸片石　以垂後人
浪華　藤沢南岳撰　柳江田中直書

【略伝】
珍物子編（一九〇九）には、木原茂平翁について以下のように書かれている。

大阪新町の名物男と呼ばれて一方には芸妓屋の主、一方には硝子製造業の大将と立てられた若い時から扮装を構はず真黒の厚司を着て貸座敷と工場とを掛持にする、朝は五時から起て表廻りの掃除をする、ある年京都島原の役員が来て「もし木原さんはお目覚めですか」と尋ねる「内へ入ってお尋ねなさい」と遣る、内へ入ってご主人はと聞き表で竹箒を持て穢い爺さんがそれであると知つて驚いた時「木原茂平は人でござる、衣類ではござらぬ」と遣つた、又或年廓の正副議員が綺羅を飾つて角座へ見物に行つた時、例の厚司で割り込んで大に奢侈を戒めた事もある、常には些とも怒らぬが怒る時は誰彼の差別なく怒鳴り附ける、慈善と歌舞が道楽で妻も妾も舞の上手なのを選んで迎へた、温習会に役員や芸妓がぐつ〳〵云ふとそれなら皆なお断りぢや、と刎ねつけ一手で立派な温習会を開いた事が度々ある、こんな商売をする者は日頃の心掛が第一ぢやと云つて町内に売地があると必ず共有財産に買はせる、廓に三十万円からの財産を作つたは此の人である、常には厚司を着て硝子工場の金屑と硝子の破片とを拾つて少しも驕つた事をせなんだ、この名物五年前ころりと死んで新町に秋風が吹き荒む。

⑲此式自上古

【碑面】

書曰先知稼嗇之艱難稼嗇豈可忽乎世之乱田卒汙萊其治也民皆勤於農功且百穀不足則孝悌不生教化不可施天之生百物穀莫重焉況吾瑞穂国乎住吉神社有挿秧之式也久矣毎歳五月二十八月堺市乳守之娼為植女之儀而明治八年其田為民有十年其式亦廃焉翌歳六月十四日大阪市新町廓撰妓十名行植女之儀二十年夏五月購故田献為神田於是乎其式益興焉遂以六月十四日為例嗟乎此式也殆将廃而復興者安識非神意乎凡為植女者恭敬粛慎敢莫違其儀人亦不徒観其覩妝而観稼穡之艱難則可也

妻鹿雍撰并書

明治二十三年庚寅夏五月

【説明文】

左にある石碑は住吉大社御田植神事と大阪市西区新町との関りを記したものです。

石が風化し碑文が読み難くなったので、設立時の拓本を反転して陶板に焼いて残しました。

石碑の概要

書経に、農作を軽んじてはいけない、手を抜くと直ぐ田は荒れ地となると記されている。多くの収穫を得ることは瑞穂の国日本においてはきわめて重要であり、昔からここ住吉神社でお田植の儀式を行っている。

毎年、堺市乳守廓の娼が植女となって行っていたが、明治八年の土地が民間に払い下げられ、私有地となり、明治十年途絶えた。

翌年六月十四日、大阪市新町の廓の撰妓十名が植女の儀式を行い、明治二十年には田を神田として献じた。是より毎年式が行われている。

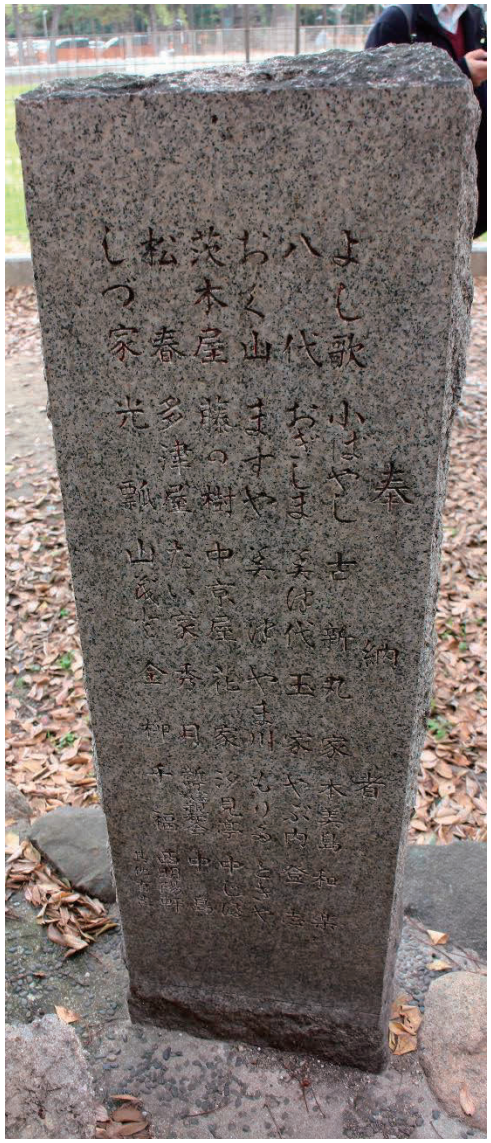
このように一度廃れた式が復活したのは神の意志であろう。植女となる人は敬虔でつつましく式を違えることなく行わなくてはいけない。見学する人はその装を楽しむのではなく、農業の重要性を観てほしい。

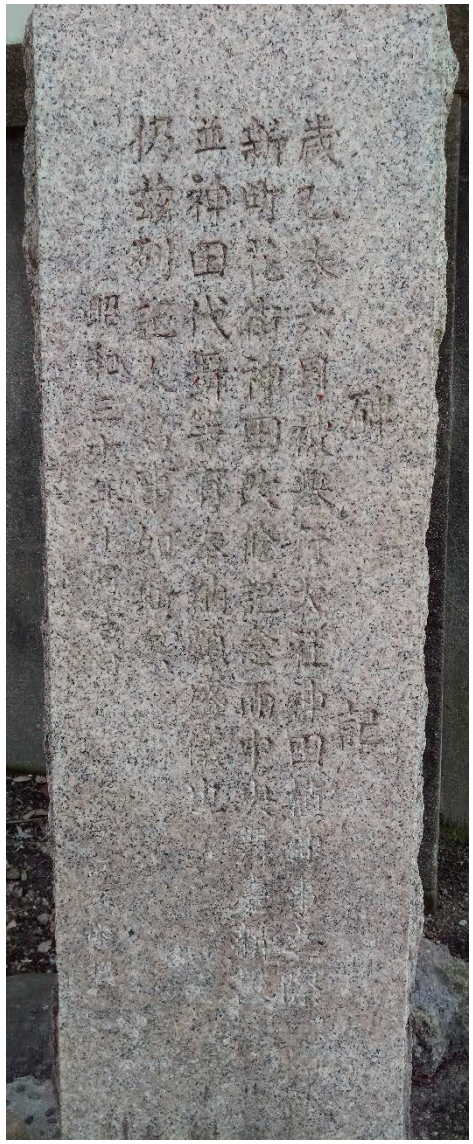
篆額「此の式上古より」住吉大社宮司　津守国敏

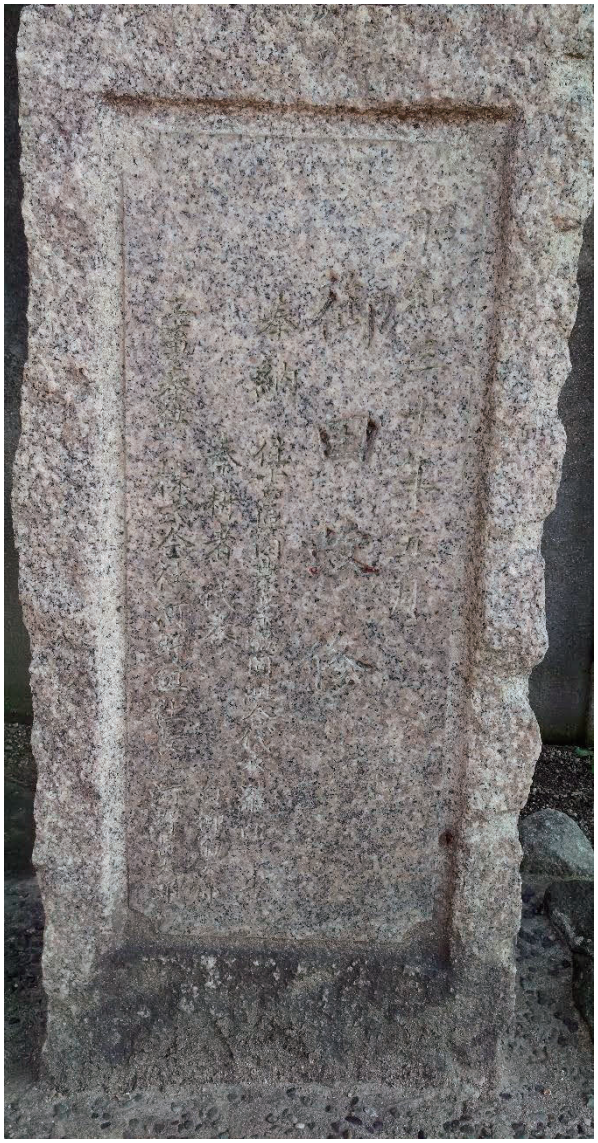
撰文・書　漢学者　妻鹿雍（新町住人　号友樵）

平成二十二年　六月吉日　妻鹿友弘　建立

⑳新町廓







【右碑】
昭和三十年五月
御田改修
奉納　住吉区内農業協同組合代表　滝口　浩
奉耕者代表　白柳菊太郎
工事奉仕　株式会社河野組社長　河野長太郎

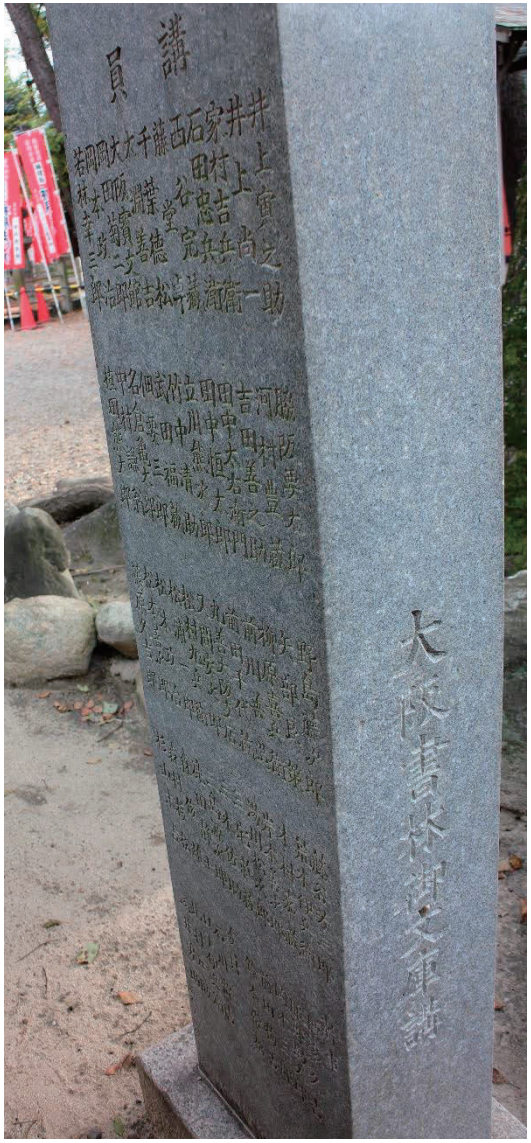
【中央碑】
新町廓

【左碑】
碑記
歳乙未六月被挙行大社神田植神事之際新町花街神田改修記念而中央舞台新設並神田代舞等
有奉納頗盛儀也
仍茲列記人名事斯矣
昭和三十年十月吉日

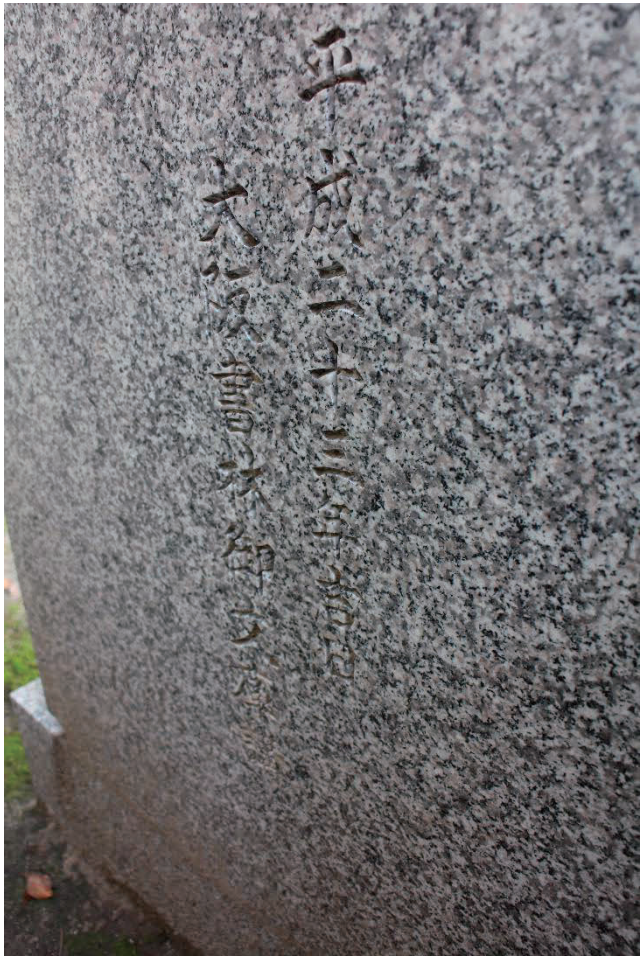
【左碑裏面】
奉納者
〔人名略〕

㉑御文庫

御文庫（おぶんこ）と呼ばれるこの土蔵造りの建物は、享保八（一七二三）年、書物を納める目的で創建された。施主は大坂を中心に京・江戸の書籍商たちである。この年、大坂の書籍商は排他的同業組合である株仲間の結成を公許されている。これを機に仲間の店が上梓した書籍の成功を祈念して住吉神前に奉納した。それ以降、明治六（一八七三）年の株仲間廃止まで、わずかな中断はあったものの奉納された書物は膨大な数に上る。和書漢籍・洋装本を併せると一万点以上、数万冊に及び、研究者も注目する貴重書も多い。


講員
大阪書林御文庫講

大阪最古之文庫



【右碑】
大阪最古之文庫

【右碑側面】
大阪書林御文庫講

【右碑裏面】
講員
〔人名略〕
石匠【写真不鮮明】

【左碑】
御文庫（おぶんこ）と呼ばれるこの土蔵造りの建物は、享保八（一七二三）年、書物を納める目的で創建された。施主は大坂を中心に京・江戸の書籍商たちである。この年、大坂の書籍商は排他的同業組合である株仲間の結成を公許されている。これを機に仲間の店が上梓した書籍の成功を記念して住吉神前に奉納した。それ以降、明治六（一八七三）年の株仲間廃止まで、わずかな中断はあったものの、奉納された書物は膨大な数に上る。和書漢籍・洋装本を併せると一万点以上、数万冊に及び、研究者も注目する貴重書も多い。

【左碑裏面】
平成二十三年吉日
大阪書林御文庫講

【御文庫について】

住吉大社編（二〇〇二）『住吉大社〈改訂新版〉』では、御文庫について以下のような説明をしている。

近世の住吉大社が遺した文化施設に、いま一つ「住吉御文庫」がある。享保八年九月、大阪・京都・江戸の書肆二十人が発起・勧誘して創建せられた。白壁土蔵造り二階建、八坪四合六勺の御文庫には、大永住吉社歌合・奉納千首和歌・奉納法楽百首等和歌の神としての崇敬を示す蔵書をはじめ、俳諧関係はもちろん、中世の写本である『月かげ』や『讃岐典侍日記』、あるいは大塩平八郎（中斎）の『洗心洞劄記』の初版本を中斎自ら奉納したもの、坂本竜馬が英語を習ったという土佐の川田白竜筆にかかる、漁夫万次郎の漂流聞書である『漂流紀略』の稿本もあり、写本・版本等貴重な文献が約三万冊納められる。

その後大阪書林仲間有志は住吉御文庫講を結び、奉納本を整理保管し文政八年には講員七十余名を数え、現在も在阪の出版社・書籍商がその伝統を継いで、毎年献本、参詣を欠かさない。昭和二十六年、田中卓博士著の『住吉大社神代記』を刊行したのも、この御文庫講の人々であった。近世ではこうして住吉大社が大阪の文化の中心となり、文化を推進する役割を果たしたのである。

これらの説明に加えて、真弓（二〇〇三）『住吉信仰』では、「いわば大阪における図書館のはじまりです」、「文政八年、住吉・天満御文庫講が合併して」ということも述べられている。

住吉大社編（二〇〇二）『住吉大社〈改訂新版〉』では御文庫に収められている文献を「約三万冊」としているが、大阪市立美術館編（二〇一〇）『住吉さん　住吉大社一八〇〇年の歴史と美術』では「写本・版本をはじめ貴重な奉納書籍が約五万冊保存されている」と説明している。

㉒安田青風歌碑

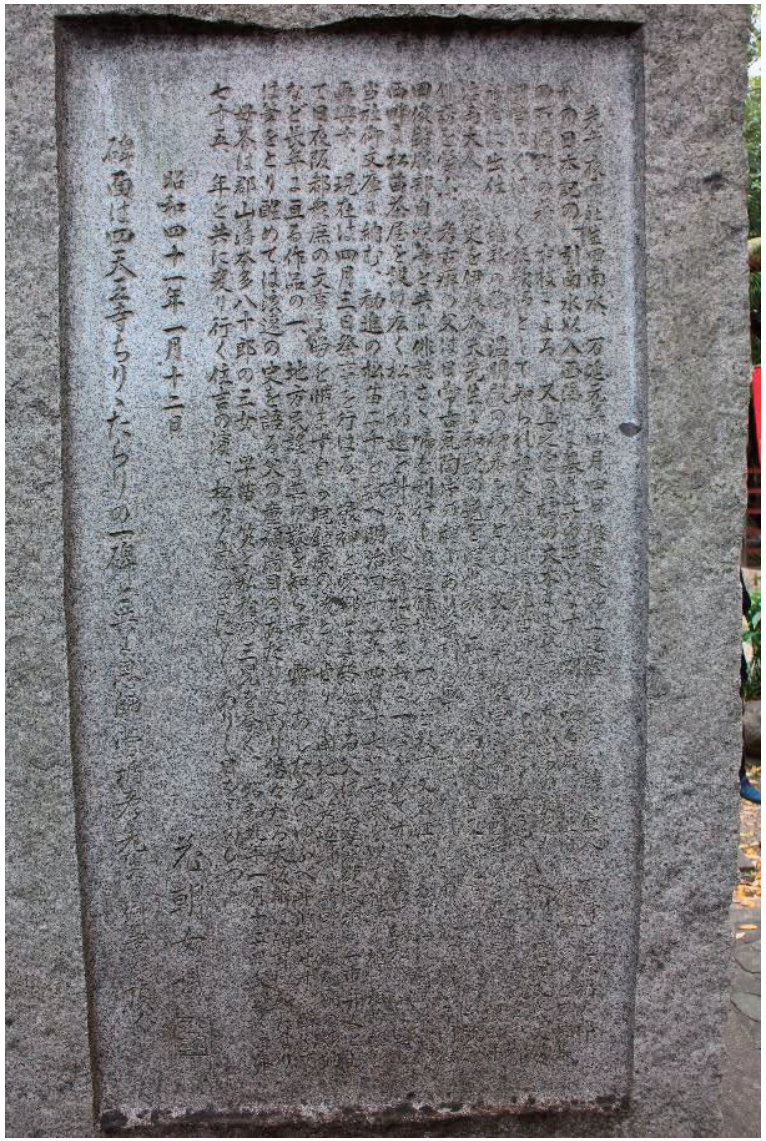
【碑面】
青風
松の間にひかりていつも海はありとこしへにかくあれ松と海

【裏面】
昭和四十年十一月
白珠社

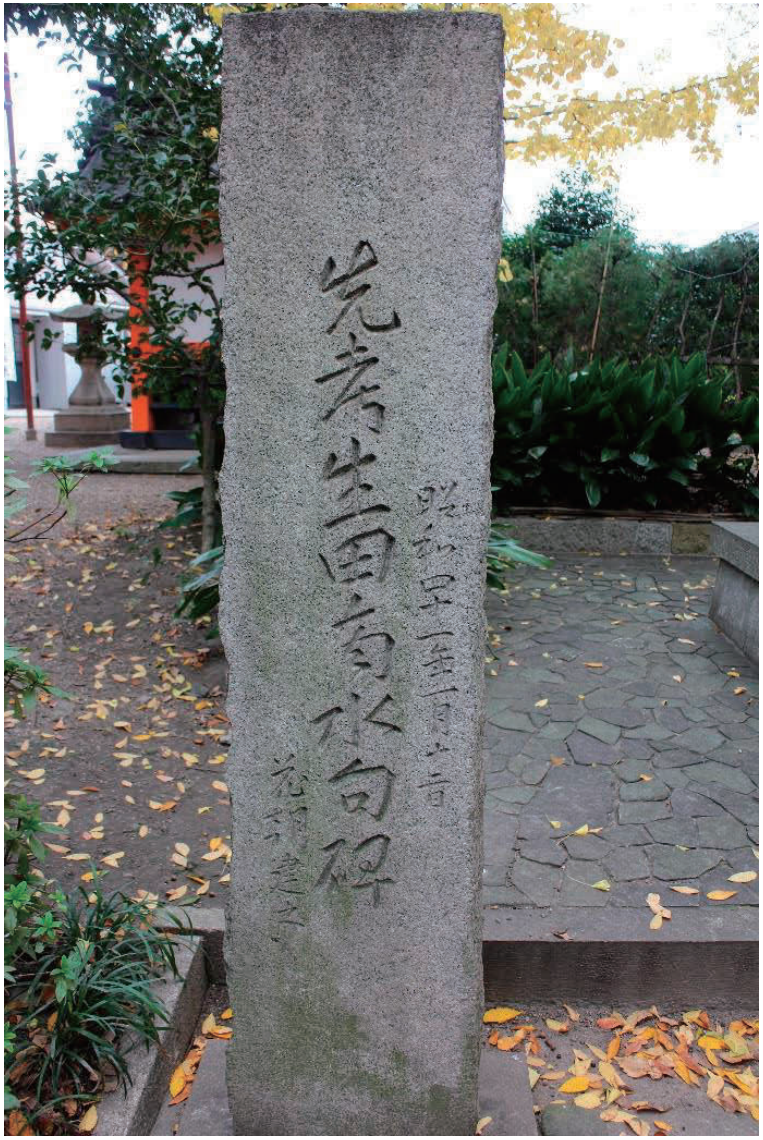
【出典】
『白珠』（一九七二年、二七巻一号）の「白珠二十五年史」の昭和四〇年の項に次のように記述がある。

社中消息的な事項の第一は、白珠社中の協力によって青風の歌碑が、大阪の住吉大社に建設（十一月二十一日）されたことである。除幕式には社内だけで一七〇名余名の出席があった。

松の間に光ていつも海はありしとこしへにかくあれ松と海



㉓生田南水句碑



【碑面】
（在印）長閑さや
岸の姫松
忘れ貝　南水（在印）

【裏面】
先考夜雨荘生田南水、万延元年四月四日浪速東郊上之宮に生る、諱は宜人、百済、通称福太郎
かの日本記の「引南水以入西海」に基き其の号となす、別に呦々居、萩垣内、鹿鳴艸舎など万葉集の百済野の萩の古枝による、又上之宮の樗の大木によせて、あふちの家ともいへり、曽祖父義文は国学にくはしく狂歌師として知られ祖父宜当は京都吉田家の卜部として亀卜の事を掌り太政官の神祇官に出仕し維新の際、温明殿の御番をつとむ、父幼より家学に親しみ国学びを岩崎長世、敷田年治両大人に漢史を伊藤介夫先生に和歌の道を渡忠秋、平尾季夫両大人に又黄花庵南齢翁の門を敲き俳諧を学ぶ、考古癖の父は日常古瓦陶片の裏にあり篆刻も画も亦おのが風をたのしむ、明治年間得田俊齢服部自咲等と共に俳誌さゝ啼を刊行し浪速俳壇に一石を投ず又大江丸の松苗集に倣ひ反り橋西畔に松苗茶屋を設け広く松苗勧進を計る、賽者松苗と共に一筆を以てす、集めて続松苗集と題し当社御文庫に納む、勧進の松苗二千を数へ明治四十二年四月十七日古式を以て神域に植え松苗祭を再興す、現在は四月三日祭事を行はる、敬神と愛郷とに終始せる父は生涯寡欲風雅に一市井人として日夜阪都

衆庶の文事に労を惜まず自ら暁鐘成の後となせり、南地の芦辺踊、新町の浪花踊の歌詞など長年にわたる作品の一、地方民謡も其の数を知らず、霜のあした花のゆふべ斗酒辞せず、酔ふては筆をとり醒めては浪速の史を語る父の童顔尚目のあたりにあり悠々たる大阪弁は尚耳に新たなり

母峰は郡山藩本多八十郎の三女、早苗、笑と私稔の三児を挙ぐ、昭和九年一月十二日父逝く享年七十五、年と共に変り行く住吉の浜、松吹く風のまに〳〵ありし日をしのびつゝ

昭和四十一年一月十二日　花朝女識（在印）

碑面は四天王寺ちりゝたらりの一碑と共に恩師菅楯彦先生の御筆を頂く

【副碑】

昭和四十一年一月十二日
先考生田南水句碑
花朝建之

【出典】

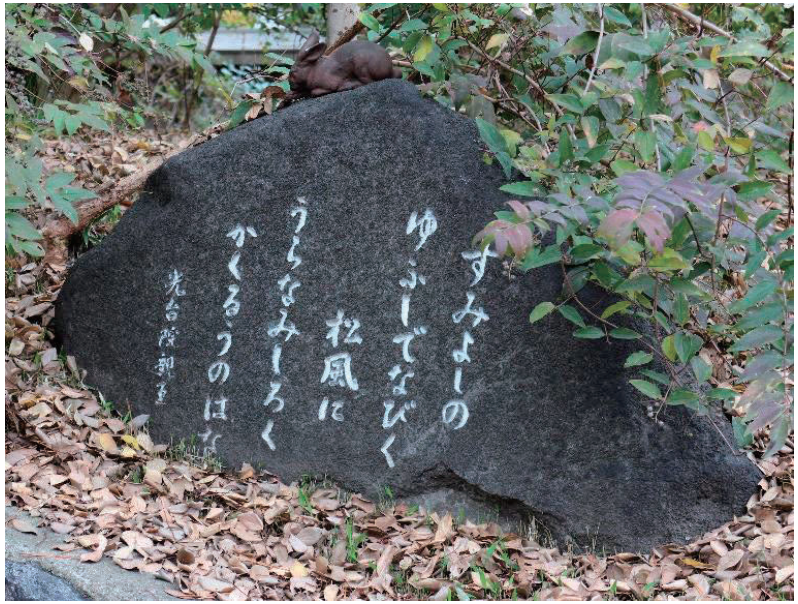
不明。

【略伝】

碑裏面参照。

㉔光台院親王歌碑

「卯の花苑」
住吉大社がこの地に鎮座されたのは、遠く神功皇后摂政十一年卯の歳卯の月卯の日と伝え、五月最初の卯の日に行なわれる「卯の葉神事」は、住吉神に卯の葉の玉串を捧げ、神威の更新を祈る重要な神事である。
卯の花はユキノシタ科のウツギという落葉低木で、品種が多く、日当たりのよい山野に自生し、かつては住吉境内にも群生していたというが、今はその多くが失われている。
これにより、住吉名勝保存会では大阪市の協力により、北海道南部から九州までのウツギの自生地を調査し、築山の土壌を改良し、山の形を整えて、現存する日本のほぼ全品種を移植し、昭和六十一年、ここに住吉大社ゆかりの「卯の花苑」を造成し、後鳥羽院皇子光台院親王の歌碑を併せて建立した。
この卯の花は、「浅沢の杜若」「車返しの櫻」とともに、古代・中世以来の歴史と伝統を伝える住吉の三名花として、永くこの地の季節を彩り続けることであろう。
（財）住吉名勝保存会


すみよしの
ゆふぜでなびく
松風に
うらなみしろく
かくるゝのはな
光台院親王

【碑面】

すみよしの
ゆふしでなびく
松風に
うらなみしろく
かくるうのはな
光台院親王

【看板】

「卯の花苑」

住吉大社がこの地に鎮座されたのは、遠く神功皇摂政十一年卯の歳卯の月卯の日と伝え、五月最初の卯の日に行なわれる「卯の葉神事」は、住吉神に卯の葉の玉串を捧げ、神威の更新を祈る重要な神事である。

卯の花はユキノシタ科のウツギという落葉低木で、品種が多く、日当たりのよい山野に自生し、かつては住吉境内にも群生していたというが、今はその多くが失われている。

これにより、住吉名勝保存会では大阪市内の協力により、北海道南部から九州までのウツギの自生地を調査し、築山の土壌を改良し、山の形を整えて、現存する日本のほぼ全品種を移植し、昭和六十一年、ここに住吉大社ゆかりの「卯の花苑」を造成し、後鳥羽院皇子光台院親王の歌碑を併せて建立した。

この卯の花は、「浅沢の杜若」「車返しの櫻」とともに、古代・中世以来の歴史と伝統を伝える住吉の三名花として、永くこの地の季節を彩り続けることであろう。

（財）住吉名勝保存会

【出典】

夫木和歌抄　巻第七　夏部一　二四五三
家五十首歌、社卯花　光台院入道二品みこ
すみよしのゆふしでなびく松風にうらなみしろくかくるうのはな

道助法親王家五十首　光台院五十首
夏　社卯花
すみよしやゆふしでなびく松かぜにうら波しろくかかる卯の花

㉕浅沢の杜若

浅沢の杜若（かきつばた）
住吉の浅沢小野の杜若
衣に摺りつけ着む日知らずも　万葉集
その昔、ここから南にかけては清水の涌く大きな池があり浅沢と呼ばれ、奈良の猿沢・京都の大沢と並ぶ近畿の名勝であった。
とくに住吉の浅沢池は、美しく咲き乱れる杜若で歌人たちに愛され、万葉集をはじめとする多くの歌集にその名をとどめている。
しかし昭和に入って「忘水」と称された浅沢の清水も枯れ、杜若に代わって明治神宮の花菖蒲が移植されていたが、平成九年地元の強い要請を受け、細江川改修の一環として浅沢に新しい水脈を加え、各地の原種の杜若を集め、ここに住吉区の区民の花の由来となる「浅沢の杜若」を復活させることができた。
いにしへを偲ぶ市民の憩の場として、この名勝を長く守り伝えなければならない。
（財）住吉名勝保存会

【看板】

浅沢の杜若（かきつばた）

住吉の浅沢小野の杜若
　衣に摺りつけ着む日知らずも　　万葉集

その昔、ここから南にかけては清水の湧く大きな池があり浅沢と呼ばれ、奈良の猿沢・京都の大沢と並ぶ近畿の名勝であった。

とくに住吉の浅沢池は、美しく咲き乱れる杜若で歌人たちに愛され、万葉集をはじめとする多くの歌集にその名をとどめている。

しかし昭和に入って「忘水」と称された浅沢の清水も枯れ、杜若に代わって明治神宮の花菖蒲が移植されていたが、平成九年地元の強い要望を受け、細江川改修の一環として浅沢に新しい水脈を加え、各地の原種の杜若を集め、ここに住吉区の区民の花の由来となる「浅沢の杜若」を復活させることができた。

いにしへを偲ぶ市民の憩の場として、この名勝を長く守り伝えなければならない。

（財）住吉名勝保存会

【出典】

万葉集　巻七　一三六一

墨吉之淺澤小野之垣津幡衣尓揩著将衣日不知毛

㉖蜀山人狂歌碑

【碑面】
【剥落】しのまつへきものをうら波のたち帰【剥落】こころなき　蜀山人
（柵内にあり他は判読不能）

【出典】
暁鐘成（一九七六）『摂津名所図会大成』には、以下のように記述がある。

柱形之碑　同北の傍ニあり勒して云　享和二のとしむつき朔日すみよしにまうでけるに
　　蕪坊の来てあらさるよしきゝて苫やのはしらに書つけけるをこゝに写す
　住よしのまつべきものをうら波の立帰りしぞしづ心なき　蜀山人
此狂詠は東都蜀山人在坂の砌天王寺の医家蕪坊と共に住吉に詣んことを約せられしにより蕪坊は先へいたりて浜辺の茶や松屋の本にいたりて待ども〳〵来らざりければ蕪坊は溜りかね終に此茶店の柱に　契りてし人を待わびて尾生が信にそむきながら立帰る　ト書つけて
　墨の江の岸に夜から来る人をまつは久しきものと社しれ　蕪坊
ト書つけて帰られしが其後へ漸に蜀山来りて是を見るより同じ柱に筆をとりて　かならずまつと言ひし人の見へざりければ同じ柱に　ト書て
　住吉のまつべきものをうら波のたち帰りしぞしづ心なき　蜀山人
ト書つけられしとぞ今も其柱を松屋に珍蔵せりとぞ然るを文政五年の秋浪花の狂歌連蕪坊の歌を略して碑を建しなり石の形丸く長く作りしはいさゝか柱の意味をふくみしものなるべし然れども蕪坊と約せし縁由をしるさゞれば前後つまびらかならず惜むべし

また、真弓常忠（二〇〇三）『住吉信仰』には次のようにある。

柱形の碑

住吉さまにお詣りしますと、北側に大海（たいかい）神社という第一の摂社があります。その社前に、柱形の碑が立っています。その碑文には、

　享和二のとしむつき朔日すみよしにまうてけるに蕪坊とく来て帰りけるよしを
きゝて茶屋のはしらに書つけけるをこゝにうつす
すみよしのまつべきものをうら波のたち帰りしそしつこゝろなき　蜀山人
　文政五の年
　壬牛の仲秋建立　　催主　種　丸
　　梅干丸
　　年布留

とあります。これは享和二年（一八〇二）正月元旦蜀山人太田南畝が、天王寺の医師蕪坊と住吉社参を約束して、蕪坊は早くから浜辺の茶屋に来て、蜀山人の来るのを待っていましたが、待てども待てども姿が見えないのでしびれを切らせて、茶店の柱に狂歌を書いて帰ってしまいました。

契りてし人を待ちわびて、尾生が信にそむきながら、たちかへるとて松屋のはしらに

墨の江のきしによるから来るひとを
まつは久しきものと社しれ

蕪坊

ところが、そのあとへ、おっとりときた蜀山人、これを見て同じ柱に、

かならず待つと言ひし人の見えざりければ同じ柱に書きつけける

蜀山

として書いたのが右の一首です。

「まつ」は「待つ」「待ちわびる」の「まつ」ですが、歌枕で神のしるしとする「すみのえの松」を踏まえているのです。まことに風流な話ですが、それをまた、後世に遺そうと、浪速の狂歌師たち、種丸・梅干丸・年布留が催主となって、文政五年に建てたのが、柱形の碑であります。

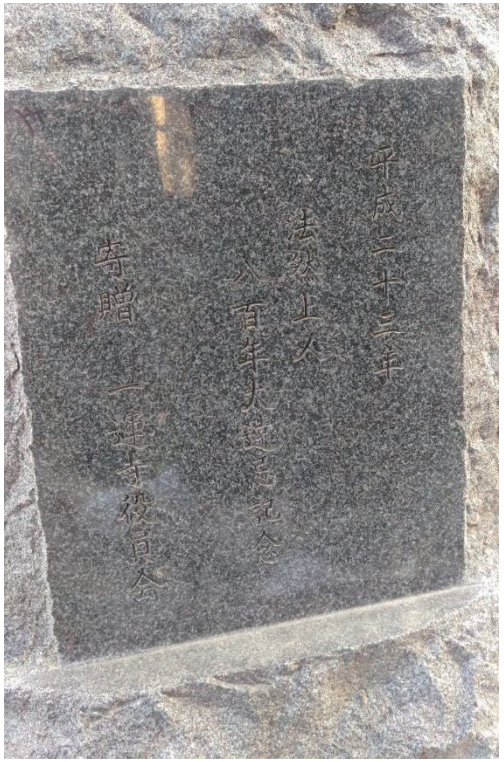
㉗一運寺句碑

【碑面】
忽然と紅吹きぬける曼珠沙華
白童

【出典】
一運寺の住職によると、先代の住職による碑。

㉘法然歌碑

法然上人は建永の法難（一二〇七）により讃岐の国（香川）に流罪となったが、その年赦免され都に帰る途中、嵐に遭われ泉州岸和田へ漂着、船が住吉まで流された。船の修理する間、上人は当寺に長くご滞在されご説法された。法然上人当時七十五歳の時である。
その時残された御歌が
「ゆきめぐる山路も里も吉水の清き流れのつきじとぞおもふ」である。
（吉水とは知恩院周辺地域の呼び名でありそこから脈々とつづくお念仏の教え）
※建永の法難　法然上人ひきいる念仏教団が、既存仏教教団より弾圧され、後鳥羽上皇によって専修念仏の停止と、法然の門弟四人の死罪、法然と親鸞ら中心的な門弟七人が各地へ流罪に処された事件。



法然上人御詠歌
ゆきめぐる山路も里も吉水の
きよきながれの
つきじとぞおもふ

【碑面】
法然上人御詠歌
ゆきめくる山ちも
里もよしのの
きよきなかれの
つきしとそおもふ

【裏面】
平成二十三年
法然上人
八百年大遠忌記念
寄贈　一運寺役員会

【副碑】
法然上人は建永の法難（一二〇七）により讃岐の国（香川）に流罪となったが、その年赦免され都に帰る途中、嵐に遭われ泉州岸和田へ漂着、船が住吉まで流された。船の修理する間、上人は当寺に長くご滞在されご説法された。法然上人当時七十五歳の時である。
その時残された御歌が「ゆきめぐる山路も里も吉水の清き流れのつきじとぞおもふ」である。（吉水とは知恩院周辺地域の呼び名でありそこから脈々とつづくお念仏の教え）
※建永の法難　法然上人ひきいる念仏教団が、既存仏教教団より弾圧され、後鳥羽上皇によって専修念仏の停止と、法然の門弟四人の死罪、法然と親鸞ら中心的な門弟七人が各地へ流罪に処された事件。

一運寺のご住職にいただいた、一運寺に関する情報が載せられたプリントには、本碑についてさらに詳しく以下のように説明されている。

法然上人受難

建永の法難（一二〇七）で法然上人は讃岐の国（香川）に流刑となった。讃岐に流されていた法然上人はすぐに赦免されましたがまだ都に帰ることは許されませんでした。勅命で箕面の勝尾寺に入る事になり一路箕面を目指し船にお乗りになりました。しかし途中嵐に遭われ泉州岸和田へ漂着、船が住吉の浜まで流されました。船の修理する間法然上人は当山に長くご滞在され、またご説法され「ゆきめぐる山路も里も吉水の清き流れの尽きじとぞ思う」と御歌を詠まれて当寺を去られたのであります。法然上人七十五歳の時でありました。そしてその年の十二月八日に無事勝尾寺に入られたということであります。

㉙摩耗不明碑

【碑面】

■おほく(?)■■
こ■のや■かに(??)
やかてち■■む
露のし■■
妙喜■
八十丸

【出典】

不明。住職に尋ねたが、よくわからないとのこと。

㉚神明穴立石

【碑面】
何首
〔下部に人名〕

【裏面】
月■■■人万
往■門■■幾
千秋

【由来】

生根神社の看板に記載されている御由緒略記には以下のようにある。

「神明穴立石」御本殿東側に有り、「何首烏」（薬草名）と刻し霊石とされている。

また、「CVV（シビル・ベテランズ&ボランティアーズ）主催　2009年度第2回市民見学会、上町台地の緑の森を訪ねて　パート5、［帝塚山（てづかやま）から　七道（しちどう）へ］〈http://www.cvv.jp/uemachidaichi5/10.html〉」には以下のようにある。

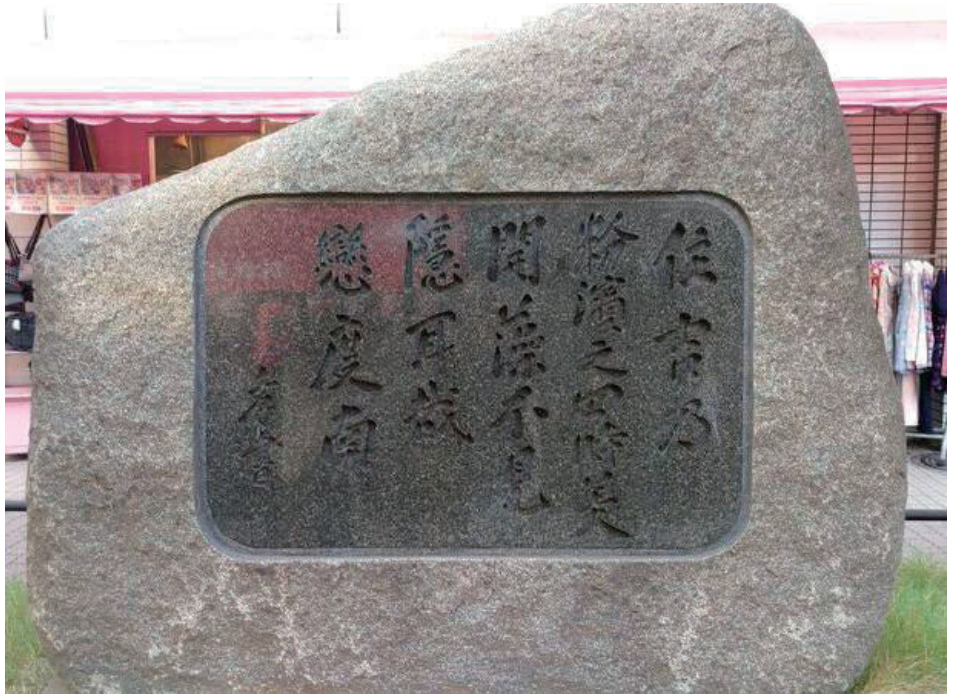
本殿東側に立つ石です。表面に漢字が刻まれているものの、よくわからないままでいましたが、「御由緒記」に以下のように書かれています。

「少彦名命が海外に行かれし時の浜の石をここに運び、『何首烏（ママ）』と刻し（薬草名）、霊石とされし時代もあり、一夜のうちに和歌浦より住吉浜に来たりし妙石なりとの伝説も今は古老の人のみが知る仮説である。」

『何首烏』は、「ツルドクダミ」と読み、タデ科の植物で、根茎から落葉性木質の蔓を伸ばし、からみつく葉はハート型でとがっているそうです。秋に無数の白い小花を開き、薬用部は、地中にある塊根だそうです。この薬草の効能は、発赤痛みを伴う皮膚炎や湿疹、便通をよくするなどです。

石の上部に穴が開いている「穴立石」は、後に行く住吉大社には、木製ですが、あります。住吉大社の「穴立板？」は、伊勢神宮の遥拝のためのようですが、ここの「穴立石」は、伊勢神宮遥拝石か、御祭神の少彦名命が薬の神様であり、生根神社の「根」に関係づけて立てたのかな？と考えます。

㉛万葉歌碑



【碑面】

住吉乃
粉浜之四時美
開藻不見
隠耳哉
恋度南

孝書

【裏面】

昭和五十九年七月七日
東粉浜社会福祉協議会

【看板】

住吉の　粉浜のしじみ　開けも見ず
隠りてのみや　恋ひ渡りなむ
（万葉集、巻六・九九七）

この歌は、天平六年（七三四）春三月、聖武天皇難波行幸の時の作者未詳の歌で、粉浜の美しい風土と人びとの奥ゆかしい心が、うたわれたもので、粉浜の歴史を知り、郷土の誇りを、永遠に伝えるため、大阪大学名誉教授犬養　孝先生の揮毫により、この歌碑を建立した。

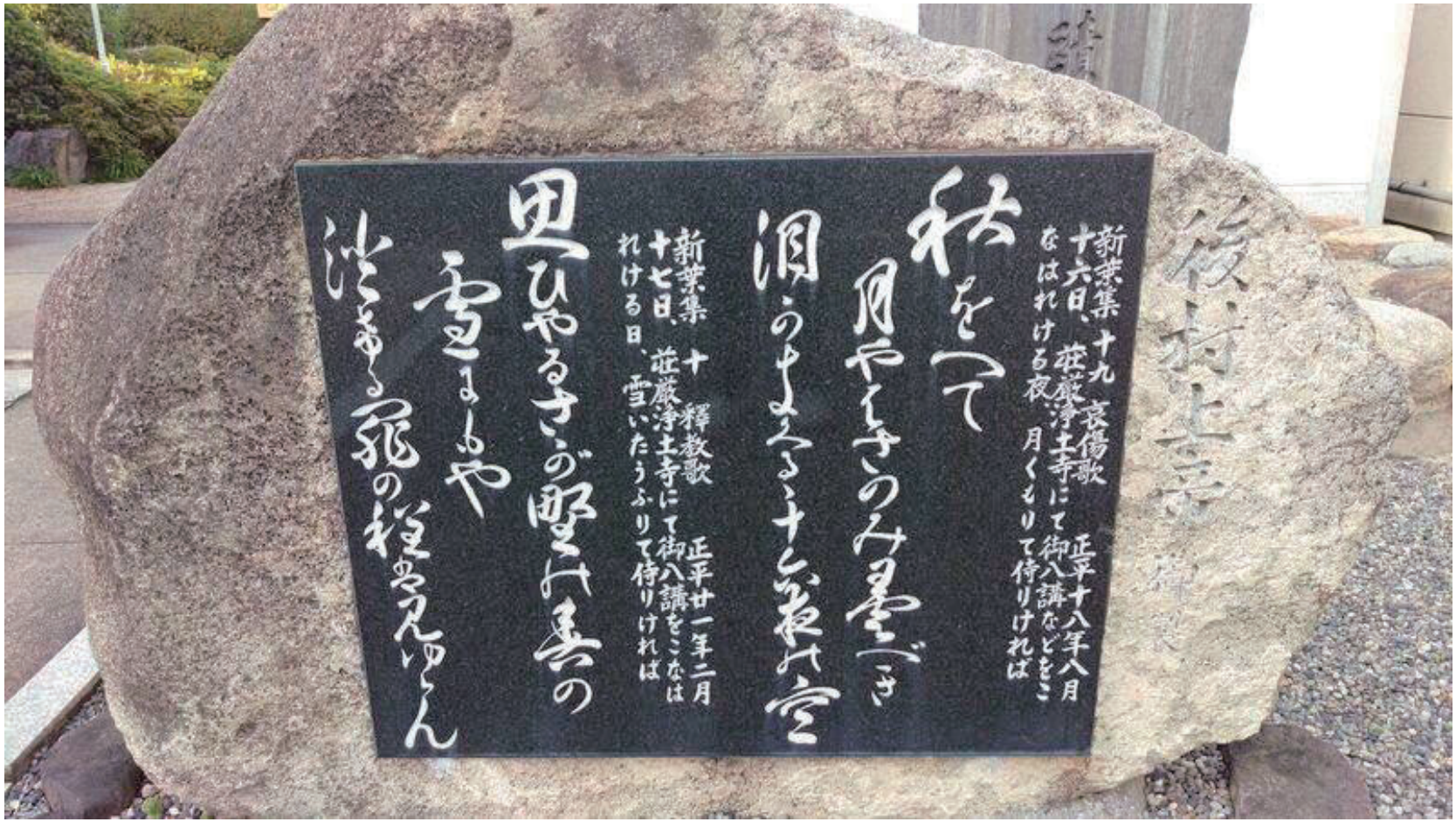
昭和五十九年七月七日

東粉浜社会福祉協議会

【出典】

万葉集　巻六　九九七

住吉乃粉濱之四時美開藻不見隠耳哉戀度南


後村上帝
新葉集十九
哀傷歌
十六日、莊嚴淨土寺にて御八講などをこなはれける夜、月くもりて侍りければ
正平十八年八月
秋をへて
月やとしのみ墨ぞ
涙のまとる十六夜の空
新葉集十
釋教歌
十七日、莊嚴淨土寺にて御八講をこなはれける日、雪いたうふりて侍りければ
正平廿一年二月
思ひやるさゝの堅き長の
雪ふるや
法をまもる苑の松のゆふかん

【碑面】

後村上帝　御製

新葉集　十九　哀傷歌　　正平十八年八月十六日、荘厳浄土寺にて御八講などをこなはれける夜、月くもりて侍りければ

秋をへて
月やはさのみ曇べき
泪かきくるゝ十六夜の空

新葉集　十　釋教歌　正平廿一年二月十七日、荘厳浄土寺にて御八講をこなはれける日、雪いたうふりて侍りければ

思ひやるさが野の春の
雪にもや
消ける罪の程はみゆらん

【出典】

どちらも新葉和歌集に収められている後村上帝の御製歌である。

・新葉和歌集　巻第十九　哀傷歌　一三五二

正平十八年八月十六日荘厳浄土寺にて御講などおこなはれける夜、月くもりて侍りければよませ給ける　　後村上院御製

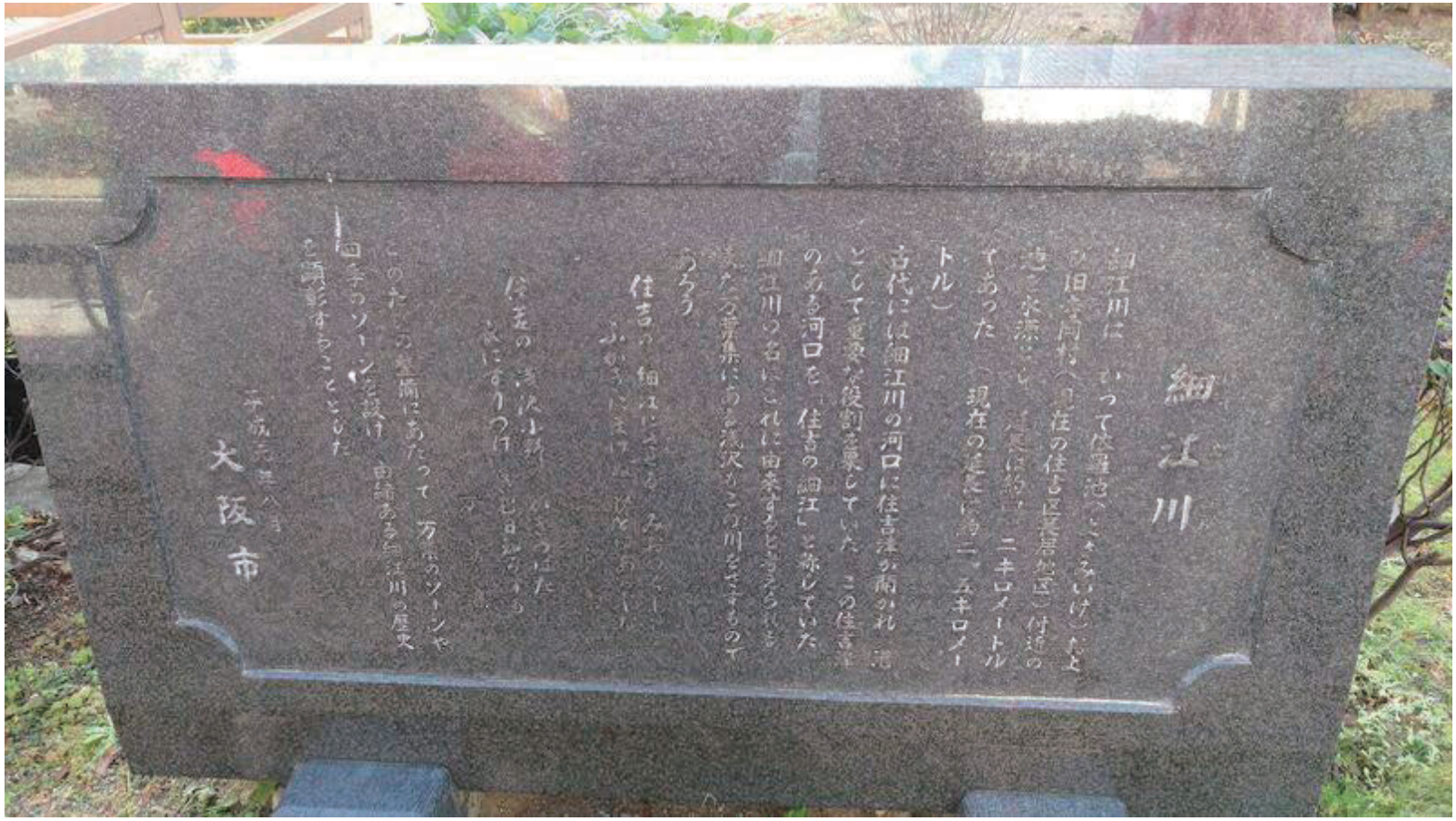
秋をへて月やはさのみくもるべき涙かきくるるいざよひの空

・新葉和歌集　巻第十　釈教歌　六一七

正平廿一年二月十七日荘厳浄土寺にて御八講おこなはれける日、雪いたうふりて侍りければ妙光寺内大臣もとへつかはされける　　後村上院御製

思ひやるさがのの春の雪にもやきえけるつみのほどはみゆらん

㉝細江川碑


細江川
細江川は
いって住吉池（ごくみいけ）など
旧淀川（現在の住吉区長居公園）付近の
造と水源とし 延長は約二キロメートル
であった（現在の長さは約二・五キロメートル）
古代には細江川の河口に住吉津が開かれ 港
として重要な役割を果していた この住吉津
のある河口を「住吉の細江」と称していた
細江川の名はこれに由来するとされる
また、この青柴にある流沢からこの川をさすもので
あろう
住吉の細江にさざなみよせし
ふるさとにまつ山びとかなしも
住吉の流沢小路がながつづく
水になりつつ
このたびの整備にあたって 万葉のソーンや
四季のソーンを設け 由緒ある細江川の歴史
を顕彰することとした
平成元年八月
大阪市

【碑面】

細江川

細江川は、かつて依羅池（よさみいけ）および旧寺岡村（現在の住吉区長居地区）付近の池を水源とし、延長は約四、二キロメートルであった。（現在の延長は約二、五キロメートル）古代には細江川の河口に住吉津が開かれ、港として重要な役割を果たしていた。この住吉津のある河口を「住吉の細江」と称していた。細江川の名はこれに由来すると考えられる。また万葉集にある浅沢もこの川をさすものであろう。

住吉の　細江にさせる　みおつくし
　ふかきにまけぬ　ひとはあらじな
　　詞　華　集

住吉の　浅沢小野の　かきつばた
　衣にすりつけ　きむ日知らずも
　　万　葉　集

この整備にあたって、万葉のゾーンや四季のゾーンを設け、由緒ある細江川の歴史を顕彰することとした。

平成元年八日
大阪市

【出典】

詞華和歌集　巻第九　雑上　三二二
　題しらず　　相模
すみよしのほそえにさせるみをつくしふかきにまけぬ人はあらじな

万葉集　巻七　一三六一
墨吉之淺澤小野之垣津幡衣尓揩著将衣日不知毛

㉞藤原俊成歌碑

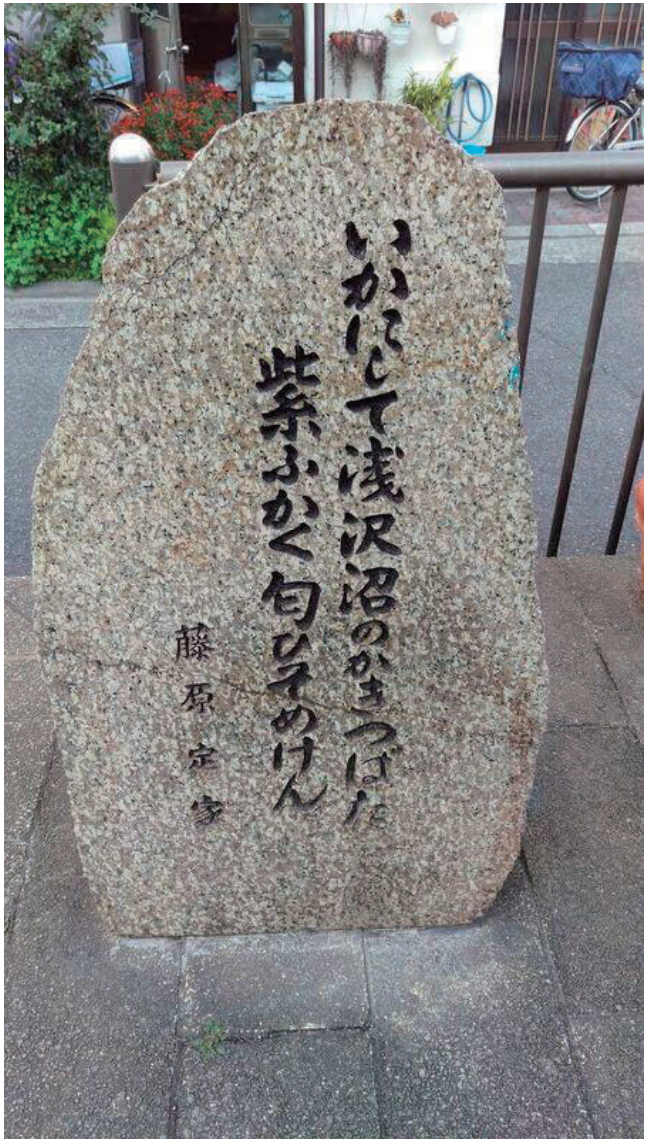
【碑面】

いざやここ若菜つみてん根芹生ふる
浅沢小野は里遠くとも
藤原俊成

【出典】

・風雅和歌集　巻第一
春歌上　一六
住吉社にたてまつりける百首の歌の中に、若菜を　皇太后宮大夫俊成
いざやこら若菜つみてんねぜりおふるあさざはをのは里とほくとも
・夫木和歌抄　巻第一
春部一　二四五
文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成卿
いざやこらわかなつみてん根芹生ふる浅沢をのは里とほくとも
・俊成五社百首　三〇五
住吉社百首和歌
春二十首
若菜
いざやこら若菜つみてんねぜりおふるあさざはをのは里遠くとも

㉟藤原定家歌碑



【碑面】

いかにして浅沢沼のかきつばた
紫ふかくにほひ染めけん
藤原定家

【出典】

拾遺愚草員外　六八七
春廿首　堀河題略之
いかにしてあささはぬまのかきつばたむらさきふかく匂ひそめけん

㊱宗良親王歌碑

【碑面】

住吉の細江漕ぎ出づる海士船の
葦間あらそう夜半の月影
宗良親王

【出典】

宗良親王千首　詠千首和歌　四四九
秋二百首
舟月
住よしのほそ江こぎ出づるあま舟の蘆間あらそふよはの月かげ

㊲顕昭歌碑

【碑面】

住吉の細江の葦も霜枯れて
よそにもしろきみをつくしかな
顕　昭

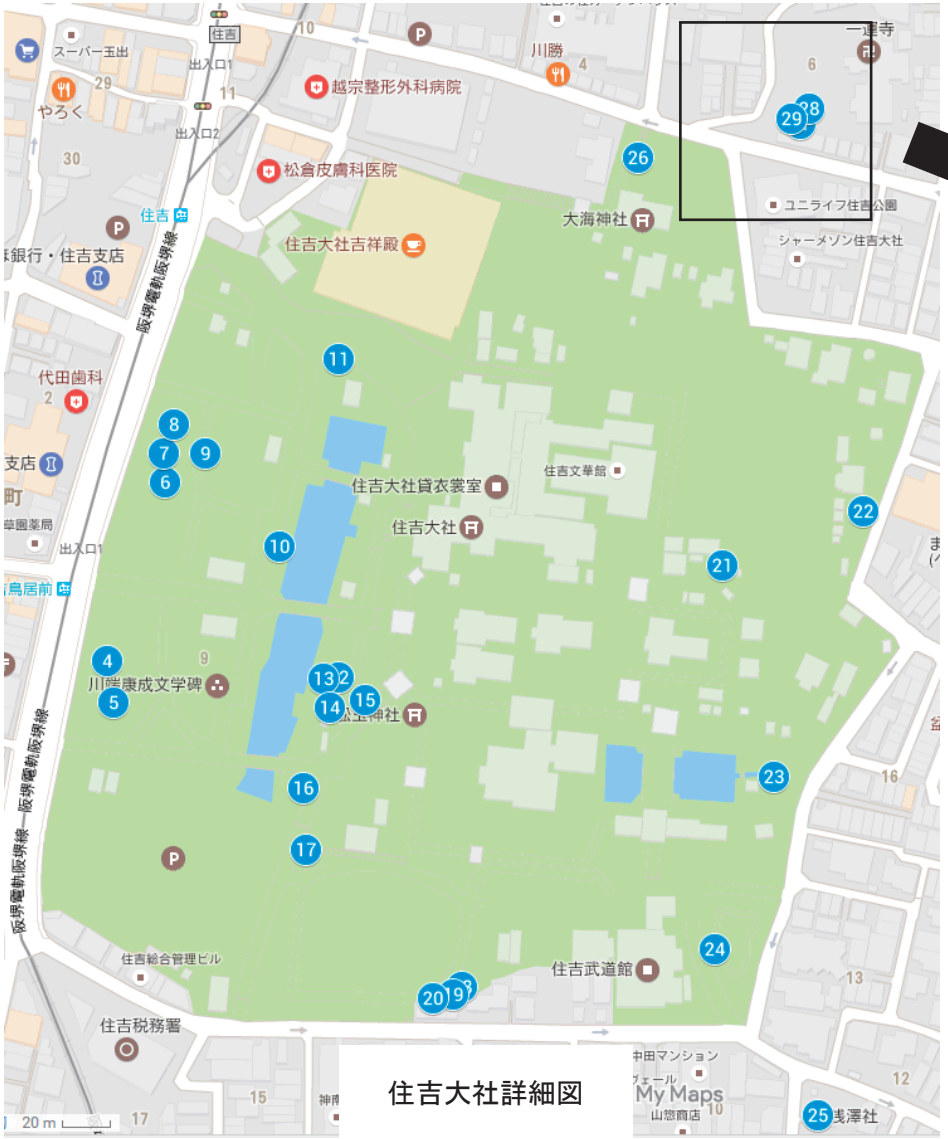
【出典】

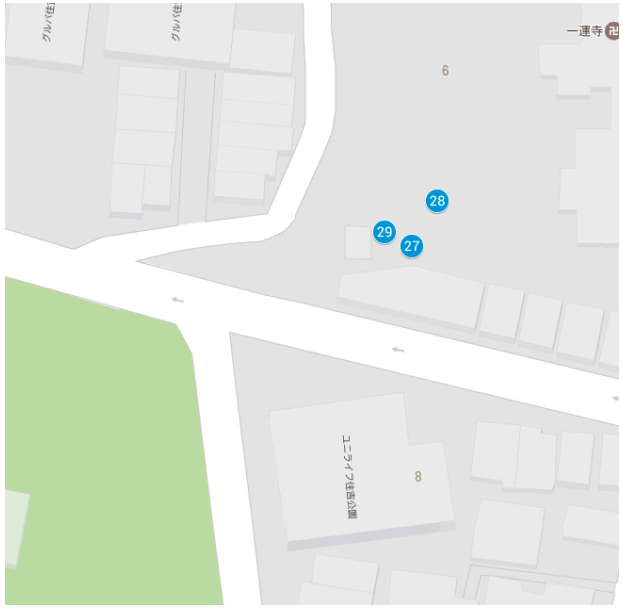
千五百番歌合　一八五八
九百三十番　左　　顕昭
すみよしのほそえのあしもしもがれてよそにもしるき身をつくしかな

碑の所在地

ウエムラサイクル・パーツ
大阪市立住吉小
粉浜
東粉浜
帝塚山四丁目
コクミンドラッグ
大阪府立病院前店
粉浜支店
順照寺
妙典寺
帝塚山東
住吉幼稚園
帝塚山西
大阪府立急性期
総合医療センター
阪和第二住吉病院
小林医院
阪堺電軌上町線
神ノ木
万代
あべの筋
西願寺
生根神社
大阪府住吉警察署
松岸寺
住吉
住吉車庫前
住吉消防署万代出張所
平嶋歯科医院
一運寺
十三佛宝泉寺
真願寺
住吉大社古祥殿
住吉霊園
東大禅寺
住吉東
大領
住吉公園
小宮クリニック
住吉公園
川端康成文
舩玉神社
西之坊
上住吉
浄光寺
万代 南住吉店
白木診療所
住吉税務署
慈光寺
溝口歯科医院
(株)栗玄
南住吉第9住宅
浜口東
細井川
阪急オアシス・住吉店
荒谷医院
安立1
南住吉1西
長居公園通
住吉行宮正印殿趾
墨江
宝林寺
南海本線
南海高野線
阪堺電軌阪堺線

全体図





Google マップを元に作成
（2017 年 2 月 21 日作成）
© 2015 Google Inc, used with permission. Google および Google ロゴは Google Inc. の登録商標であり、同社の許可を得て使用しています。

①住吉記念碑
②松尾芭蕉句碑
③汐掛道の記
④中村若沙句碑
⑤高木石子句碑
⑥阿波野青畝句碑
⑦宮本竹逕歌書碑
⑧大橋桜坡子句碑
⑨都鳥社歌碑
⑩住吉万葉歌碑
⑪海竜王処碑
⑫井原西鶴句碑
⑬大伴大江丸句碑
⑭川端康成碑
⑮津守国美歌碑
⑯天皇陛下御在位六十年奉祝記念碑
⑰安江不空歌碑
⑱木原茂平翁遺績碑
⑲此式自上古
⑳新町廓
㉑御文庫
㉒安田青風歌碑
㉓生田南水句碑
㉔光台院親王歌碑
㉕浅沢の杜若
㉖蜀山人狂歌碑
㉗一運寺句碑
㉘法然歌碑
㉙摩耗不明碑
㉚神明穴立石
㉛万葉歌碑
㉜後村上帝歌碑
㉝細江川碑
㉞藤原俊成歌碑
㉟藤原定家歌碑
㊱宗良親王歌碑
㊲顕昭歌碑

参考・引用文献一覧

①住吉記念碑

大阪市立美術館編（二〇一〇）『住吉さん　住吉大社一八〇〇年の歴史と美術』

武田祐吉編（一九三七）『風土記』岩波書店

②松尾芭蕉句碑

住吉大社編（二〇〇二）『住吉大社〈改訂新版〉』学生社

真弓常忠（二〇〇三）『住吉信仰』朱鷺書房

③汐掛道の記

佐竹昭広ほか（二〇一二）『補訂版萬葉集本文篇』補訂版九刷、塙書房

⑤高木石子句碑

住吉大社社務所（一九八八）『すみのえ』通巻一八七号、五七頁

⑥阿波野青畝句碑

安達しげをほか（一九八九）『大阪の俳人たち　1』和泉書院

阿波野青畝（一九九九）『阿波野青畝全句集』花神社

住吉大社社務所（一九八八）『すみのえ』通巻一八号、三九頁

⑦宮本竹逕書歌碑

福　山　誠　之　館　同　館　〈 http://wp1.fuchu.jp/~sei- dou/jinmeiroku/miyamoto-tikukei/miyamoto- tikukei.htm〉（二〇一七年二月二一日アクセス）

プロフィール宮本竹逕〈http://www.all- japan- arts.com/swf/miyamoto- pro.swf〉（二〇一七年二月二一日アクセス）

宮本竹逕（一九七一）『書道技法講座〈かな・関戸本古今集〉』二玄社

⑧大橋桜坡子句碑

大阪俳句史研究会編（一九九五）『大阪の俳人たち　4』和泉書院

⑩住吉万葉歌碑

佐竹昭広ほか（二〇一二）『補訂版萬葉集本文篇』補訂版九刷、塙書房

住吉大社社務所（一九九一）『すみのえ』通巻二〇一号、四一頁

⑫井原西鶴句碑

天理大学附属天理図書館（一九六五）『西鶴』便利堂

吉江久彌（二〇〇八）『西鶴全句集　解釈と鑑賞』笠間書院

⑬大伴大江丸句碑

乾猷平（一九二四）『秋存分・常盤の香』古俳書文庫第拾篇、天青堂

上田高嶺（一九九四）『大江丸旧国　遺稿と生涯』

大阪市立美術館編（二〇一〇）『特別展　住吉さん　住吉大社一八〇〇年の歴史と美術』

大谷篤蔵（一九五九）「大江丸書翰集」『ビブリア』一五巻、天理図書館

岡野知十校訂（一八九八）『一茶大江丸全集』俳諧文庫第一一編、博文館

鈴木重雅（一九三二）「俳人大江丸の研究（一）」『国語教育』一七巻五号、育英書院
鈴木重雅（一九三二）「俳人大江丸の研究（二）」『国語教育』一七巻六号、育英書院
鈴木重雅（一九三二）「俳人大江丸の研究（三）」『国語教育』一七巻一〇号、育英書院
文入宗義（一九五九）『俳句講座３　拝伝人評　下』明治書院
真弓常忠（二〇〇三）『住吉信仰』朱鷺書房

⑭川端康成碑

川端康成（一九八一）『川端康成全集第七巻』新潮社

⑮津守国美歌碑

菅宗次（一九八八）「津守国美について」『すみのえ』一九〇号、住吉大社社務所
津守国美（一八八一）『津守国美和歌集』

⑯天皇陛下御在位六十年奉祝記念碑

宮内庁侍従職編（一九九〇）『おほうなばら　昭和天皇御製集』八六頁、読売新聞社
住吉大社社務所（一九八六）『すみのえ』通巻一八三号、四七頁

⑰安江不空歌碑

原清治編（一九六四）『安江不空全歌集』安江不空全歌集刊行会
安江不空プロフィール〈http://web1.kcn.jp/narakappa/yasuepro.html〉（二〇一七年二月二一日アクセス）

⑱木原茂平翁遺績碑

珍物子編（一九〇九）『珍物畫傳』楽山堂書房（国立国会図書館デジタルコレクション）〈http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/778379/88〉（二〇一七年二月二一日アクセス）

㉑御文庫

大阪市立美術館編（二〇一〇）『住吉さん　住吉大社一八〇〇年の歴史と美術』
住吉大社編（二〇〇二）『住吉大社〈改訂新版〉』学生社
真弓常忠（二〇〇三）『住吉信仰』朱鷺書房

㉒安田青風歌碑

安田喜一郎（一九七二）『白珠』二〇巻一号、白珠社

㉔光台院親王歌碑

「新編国歌大観」編集委員会（一九八四）『新編国歌大観　第二巻　私撰集編　歌集』角川書店
「新編国歌大観」編集委員会（一九九二）『新編国歌大観　第十巻　定数歌編Ⅲ、歌合編Ⅱ、補遺編　歌集』角川書店

㉕浅沢の杜若

佐竹昭広ほか（二〇一二）『改訂版萬葉集本文篇』補訂版九刷、塙書房

㉖蜀山人狂歌碑

暁鐘成（一九七六）『摂津名所図会大成』柳原書店
真弓常忠（二〇〇三）『住吉信仰』朱鷺書房

㉘法然歌碑

「浄土宗　一運寺」（二〇一七年二月一八日に一運寺住職から拝受したパンフレット）

㉚神明穴立石

10.生根神社〈http://www.cvv.jp/uemachidaichi5/10.html〉（二〇一七年二月二一日アクセス）

㉛万葉歌碑

佐竹昭広ほか（二〇一二）『補訂版萬葉集本文篇』補訂版九刷、塙書房

㉜後村上帝歌碑

「新編国歌大観」編集委員会（一九八三）『新編国歌大観　第一巻　勅撰集編　歌集』角川書店

㉝細江川碑

佐竹昭広ほか（二〇一二）『補訂版萬葉集本文篇』補訂版九刷、塙書房

「新編国歌大観」編集委員会（一九八三）『新編国歌大観　第一巻　勅撰集編　歌集』角川書店

㉞藤原俊成歌碑

「新編国歌大観」編集委員会（一九九二）『新編国歌大観　第十巻　定数歌編Ⅲ、歌合編Ⅱ、補遺編　歌集』角川書店

「新編国歌大観」編集委員会（一九八四）『新編国歌大観　第二巻　私撰集編　歌集』角川書店

㉟藤原定家

「新編国歌大観」編集委員会（一九八五）『新編国歌大観　第三巻　私家集編Ⅰ　歌集』角川書店

㊱宗良親王歌碑

「新編国歌大観」編集委員会（一九九二）『新編国歌大観　第十巻　定数歌編Ⅱ、歌合編Ⅱ、補遺編　歌集』角川書店

㊲顕昭歌碑

「新編国歌大観」編集委員会（一九八七）『新編国歌大観　第五巻　歌合編、歌学書・物語・日記等収録歌編　歌集』角川書店

本報告書は、関西大学創立一三〇周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）（研究課題　住吉・堺の歴史景観の復元）の研究成果の一部として公開するものです。

住吉周辺の歌碑・記念碑めぐり

発行日　二〇一七年三月七日
発行所　関西大学なにわ大阪研究センター
編　集　乾　善　彦
〒五六四-八六八〇
大阪府吹田市山手町三―三―三五
印刷所　大都印刷株式会社